高畠素之論

――大正社会主義の分化――

田中真人

【要約】日本の大正期社会主義は、明治期の啓蒙期段階から運動の実体化をめざす模索期といえるが、日露戦争後の戦略論議の継承として〈政治運動即議会政策か、経済運動即直接行動か〉という二者択一として議論された。しかし大正期の民衆の政治的自由獲得運動への社会主義者の介入の必要は、その全面否定か全面肯定かという対応からの転換をせまられていた。同じ頃、ロシア革命を成功させたボルシェヴィキ党は〈政治運動も経済運動も〉という両者の止揚者であると観念した高畠素之は、そのモデルによって社会主義者の主流であった直接行動主義者を批判し、十年来の議論の止揚を試みた。しかし政治革命成功後のソヴィエト国家の巨大化の必然は、マルクス主義の集産的経済実現のための必然とみた高畠は同じロシア革命をモデルに国家社会主義をマルクス主義の論理的発展の先取りとして唱え、その故に日本社会主義史において彼は右翼反動への転向者として片づけられているが、大正社会主義の避けることのできぬ問題に正面から対処せんとした山川均と並ぶ大正期社会主義の最高の理論家を正当に位置づける必要があると思われる。

史林　五三巻二号　一九七〇年三月

序　大正社会主義の位置

日本社会主義史上における大正期は、明治社会主義とは明らかに異なった段階にみることができる。明治三〇年代に始まった日本の社会主義は、日露戦争直前に発表された二著『社会主義神髄』（幸徳秋水）『我社会主義』（片山潜）をもって、その第二インターナショナル正統派的な紹介と啓蒙の時代の頂点をなし、日露非戦運動の終焉の中で新たな分化と再編の時代を迎えるのである。まずそれは基督教社会主義の分離として、次いで幸徳、片山をそれぞれの代表者とする「直接行動」か「議会政策」かをめぐる分化として。そして幸徳事件とその後の「冬の時代」を経る中で日本社会主義史上における新しいサイクルの展開が始まるのである。本稿にいう「大正社会主義」とは、明治社会主義の啓蒙と

紹介の時代から昭和期の無産政党運動をつなぐものとして、後者の開始のための運動の実体化、具体化の模索の時代の社会主義ともいうことができよう。そして新しい社会主義運動を模索する中では原理論から現状分析、戦術論のための様々な試行錯誤が展開されるのは当然ともいえよう。この期の最も代表的な社会主義者である山川均の、直接行動論→サンディカリズムへの傾斜→「方向転換」論→日本共産党結成への参与→解党→労農派マルクス主義、という過程は、模索の時代としての大正社会主義の人格的表現とさえいえよう。

さらにこの時期の社会主義の頂点思想家群—山川均、荒畑寒村、大杉栄、高畠素之、堺利彦らの中には、一人として一九二二年結成の日本共産党に所属しつづけたものはいないのである。（一九一四年「冬の時代」の中でアメリカへの事実上の「亡命」をし、ロシア革命を機に入露する片山潜を唯一の例外として。しかし彼は日本の大正期社会主義運動には何の影響力も有してはいない）。社会主義運動の第一期の模索者たちが、今日の正統派共産主義運動となるコミンテルン型運動にあいいれぬものと感じたものは何であったであろうか。

大正期社会主義者に、意識的あるいは潜在的に規定したモメントとして、次のことをあげることができる。第一は、日露非講和運動から普選実施に至る二〇年間の「大正デモクラシー運動」である。大正デモクラシーを総体としては明治憲法体制に対する人民の民主化運動として把えるとすれば、その照応関係（あるいは反撥関係）の中で「人民の民主化運動」への介入と実体化を模索する「大正社会主義」をも「大正デモクラシー期の社会主義」というワンピリオドでもって把握できないだろうか。

大正社会主義を規定する第二のモメントは一九一七年のロシア革命の成功である。世界最初の社会主義国家を成立させたこの革命はまさに世界史上の新展開を画したものであるが、旧来の美しき歴史叙述とはうらはらにこの革命が直ちに直接大きな影響を、日本の労働運動を始めとする諸運動にもたらしたとはいいがたい。[1] しかし、少なくとも明治社会主義の分化を完成させ、大正期社会主義の新展開をもたらした点では大きなモメントとして考えねばならない。

同時に、大正期社会主義者における「国家」論に焦点をあてることは、その分化をあとづける上で興味あることで

ある。直接行動論と議会政策をめぐる明治社会主義の分化は、大正期に入って、サンディカリズムの是非をめぐる論争を経て「アナ・ボル」論争に到達するが、民本主義に対する社会主義者の対応、およびロシア革命のもたらした影響という、先にあげた大正社会主義を規定する二つのモメントが、最も典型的にあらわれているのがこの国家論をめぐる問題であった。この問題こそ民権論の国権論への屈伏以来の一連の民主主義運動の古くて新しい問題であり、明治体制からの脱却とその民主化を課題とする大正期の諸運動の総体にのしかかってくる大きな問題であった。

本稿では大正社会主義の頂点思想家群の一人、高畠素之（一八八六―一九二八）に焦点をすえながらこれらの問題を考察してゆきたい。けだし高畠こそ、大正デモクラシー期とロシア革命の時代に生きた社会主義者として、その独特の国家論を中心に大正社会主義者の直面した問題に正面から対処した数少い思想家の一人と思われるからである。

およそ近代日本社会思想史のテキストの中で高畠の名を欠落させたものをみつけるのは難しい。彼はマルクス主義の最大の古典『資本論』の最初の、そして戦前における唯一の完訳者として日本におけるマルクス経済学の方法と諸カテゴリーの導入の貢献者として知られている。[2] あるいは彼はロシア革命を最も正確に日本に紹介した最初の日本人として（一九一七年）、さらには大正期の山川・荒畑らのサンディカリズム的見解に対してマルクス主義者の中での最も的を得た批判者として（一九一八年）記述され、そして一九一九年「国家社会主義」への転向者として忽然として通史の記述から消えるのであって、彼の「転向」の内的論理をさぐったものは少ない。例えば『講座近代日本社会思想史』（一九六七年）第二巻第五章（徳留徳執筆）では、高畠のロシア革命、レーニン、ボルシェヴィキへの深い理解について述べたあと「しかし高畠のマルクス主義にもひとつの重大な陥穽があった。彼は労働者階級を忍耐強く組織し、その前衛としてのマルクス主義者の積極的な任務を認識することができず、プロレタリアートの独裁についての皮相な認識からやがて『国家』という怪物のとりことなってしまうのである。……まもなく高畠はあっさりとマルクス主義に見切りをつけ、国家社会主義へと変質していくのである」（二四一頁）と片づけているが、このような高畠への

「皮相な認識」が現在の通史のパターンである。[3]

後年、堺利彦をして「資本論の反訳を完成したマルクス学の大功労者が、ついに自ら純正のマルキストであり得なかったことを、いくらうらんでもうらみきれない[4]」といわしめた高畠の「転向」は果して転向そのものであったのか。マルクス主義の日本的「屈折」形態、「土着の思想」の一変程であったのか。[5] 実は高畠が『資本論』翻訳を始めとするマルクス主義理論、とくにその国家論の労作を発表するのはこの一九一九年以降のことであり、[6] 彼の国家社会主義理論と、マルクス思想の研究は、彼の主観では何ら矛盾したものではなかったし、彼自身生涯自己を非マルクス主義者と規定したことはなかった。その理論はあくまでマルクス主義の方法を踏むという形式で構成された。

日本ではすでに明治末年において山路愛山に代表される国家社会主義思想を登場させている。愛山には、日本における国家社会主義者に共通する特質——社会主義への関心と共鳴・資本主義の矛盾である独占的傾向や貧富の問題への憂慮、国体論に関する特殊な考察、対外的危機にうらづけられた国際情勢観を胚胎させていたとはいえ、高畠以下後年の国家社会主義者に比し、社会主義の認識の浅さなど、その基調は大正デモクラシー前期を反映して小ブル民主主義の域を出るものではなかった。これに対し高畠は、愛山のように皇室の仁政の伝統によりどころを求める古風なものでもなく、また北一輝の如く、社会進化論の究極的適用という飛躍的なものでもなかった。マルクス主義理解の深さの点では高畠に比すべきものはいないし、日本における国家「社会主義」は高畠をもってその真正のスタートを切った、といいうる。[7]

明治以来の日本の反体制運動における「国権と民権」の問題は昭和に至る近代日本全体に強い影を落している。石田雄氏は、日本の社会主義が先行する社会有機体論、「家族国家」観の支配的思潮のため、国家社会主義とその裏がえしとしての無政府主義に両翼分化する傾向と指摘していた。[8] また辻野功氏は、黎明期労働運動が福沢諭吉の「国家的独立の為の個人の解放」の思想の継承として「国家繁栄の為の労働運動」（高野房太郎）として出発したが、治安警察法制定による坐折から平民社の社会主義への転換を「ナショナリズムの運動から非ナショナリズムの運動への転

換」であるにしても、それはインターナショナリズムというよりは、国家とか民族を無視して抽象的な文明、世界、人類等に絶対的な価値を付与するコスモポリタニズムに近いものであり、ナショナリズムの時代にナショナルな課題を欠いた運動の破綻の必然性を指適し、逆に黎明期労働運動の「ナショナルな課題」への対処を肯定的に評価している。[9]

高畠の意図したものは、大衆の政治過程への広範な登場という大正デモクラシー状況の中で、しかもE・Hカーのいう「大衆のナショナリズム」というナショナリズムの第三期において、[10]「直接行動」か「議会政策」かという議論を止揚し、真の大衆運動としての運動の展開の中で、日本社会主義史上における「明治の終焉」を達成することであり、この大正社会主義の直面する課題の中で、高畠国家社会主義論を把えなおすことが本論の課題である。

I　ロシア革命、山川＝高畠論争

高畠素之は、旧前橋藩士、士族高畠武増の五男として一八八六年前橋に生まれ、前橋中学時代にキリスト教を通じて社会主義への関心を深めていった。[11]経済的事情もあって奨学金のでる同志社神学校に進学したが、この在学中日露戦争後のキリスト教社会主義の分離の思潮を反映してキリスト教をすて、僚友遠藤友四郎、伊庭孝らと共に同志社を退学、本格的な社会主義運動の実践化をめざして一九〇八年には後に大逆事件にも有形無形の影響を及ぼす『東北評論』を郷里前橋、高崎で発刊するに至るが、この時期の高畠は他の若い社会主義者と同じく幸徳秋水の「直接行動」論の圧倒的影響下にある例外ではなく、またクロポトキンの影響も顕著であった。二二歳の青年高畠の発行したこの新聞は赤旗事件の報道に対する新聞紙条例違反等の弾圧のためのわずか四号で廃刊、高畠は禁錮二ヵ月の刑で下獄するが、この獄中において、安部磯雄・山川均らによって紹介されていた『資本論』をひもとくことになるのである。

一九〇八年の暮の出獄後、手も足もでぬ社会主義者への弾圧と、崇敬する領袖秋水や『東北評論』の仲間新村忠雄、同志社時代に社会主義を語りあった友人大石真子・七分姉弟の叔父誠之助らの刑死の報を聞きつつ、彼は京都、神戸方面を放浪し飯の種をみつけながらドイツ語の勉強とマルクス主義理論の研鑽にはげんでいた。下獄と理論研鑽の

「実績」をもって一九一一年東京の堺宅を四年ぶりに訪れる。かつて同志社脱走後にころがり込んだ時は、事実上の門前払いをくった高畠も、以後は堺が最も期待する新進のホープ[12]として大逆事件後の「冬の時代」の社会主義者の中央センターともいうべき売文社の一員としてすごすことになるわけである。

堺の期待通り、片山が渡米し山川はまだ上京していない中で『資本論』をものにでき国際情勢に明るい理論家の筆頭に高畠がいたことは一九一五年九月『へちまの花』改題第二巻一号として誕生した『新社会』の毎号にわたる論説によってもうかがえる。すでに大杉・荒畑の『近代思想』や茅原華山の『第三帝国』などに哲学・経済学の論稿やヨーロッパ社会党の動向を紹介していた高畠は『新社会』においては毎号『万国時事』(International Note) を担当し、価値論・進化論などマルクス・マルサス学説の紹介と批判、トルストイの評価をめぐる問題点を書きまくっていたが、文字通り社会主義者の中心活動家としての高畠が重要な働きをする年が一九一七年なのである。

この年の高畠の仕事で注目されるのは、①『新社会』二月号より二三回にわたって連載されたカウツキー『資本論解説』の翻訳 ②四月の堺総選挙立候補の際の選挙参謀としての中心的働き ③ロシア革命についての詳細な紹介と検討、である。そしてこれらはすべて翌年の山川・荒畑との論争の伏線をなしている。

寺内内閣の下に執行された第一三回総選挙における堺の立候補は一五年前の木下尚江以来、久しぶりの社会主義者候補であったが、山川・荒畑はそのサンディカリズム的傾向から消極的であり、大杉は前年秋神近市子・伊藤野枝との三角関係のもつれから生じた神近の大杉傷害事件もあり「蟄居中」で全く不参加という状況で、このため売文社としての選挙活動は行わず実行委員会形式でもって在京のほとんどの社会主義者と自由主義左派論客との連合戦線でのぞんだが、幹事役は吉川守圀、山崎今朝弥、それに高畠である。[13] 彼が積極的に動いたのは、反サンディカリズム、普選擁護の理論的立場の明確化があったわけであるが、一九〇七年の日本社会党第二回大会以来、そして第一次大戦を契機とする第二インターの崩壊以後ますます議会主義否認、直接行動一本槍のアナルコ・サンジカリズムが主流の中で、

堺と共に高畠は何故議会主義路線への執着を持ち続けていたのか。高畠自身もかつてはそれら「直接行動」論者の一人であるはずなのだが、高畠には「直接行動」か「議会政策」かという抽象的議論を止揚したこの時期における実行運動としての可能な道を模索するというのがその行動の基本であった。この理論的な作業はロシア革命の事態を分析する中で整理され、直接行動と議会政策を止揚した革命党としてのボリシェヴィキに自己の理論的裏づけを求めていくことになる。

『新社会』誌上においては三月革命の報の入った直後の一九一七年四月号以降、高畠・山川・堺を中心に系統的な紹介論文を掲載している。まず四月号の時評で山川は革命のホットニュースを聞き「露都の罷業と暴動とが、どの点までが純粋なるパンの欠乏によるものであるか」は全くの「五里霧中」であるが、祖国の戦争の最中に起ったロシア最大の工業都市での労働者の蜂起に注意を呼びかけている。[14]

次いでより具体的にロシア革命を紹介したのは高畠の「革命渦中の露独」（五月号）「万国時事」（六月号）で、ここにおいては、ロシア社会主義者中の社会革命党、および社会民主労働党の二派（ボルシェヴィキとメンシェヴィキ）の相違を紹介、またソヴィエトを「労働者兵卒連合委員会」と比較的正確に訳して、その役割・臨時政府との関係について述べている。周知の通り二月革命から七月までのロシアは「歴史上まれな二重権力状態」（レーニン）である臨時政府とソヴィエトという二つの権力の出現をもたらした。しかし日本の新聞は臨時政府と議会の報道ばかりでソヴィエトに関し報ずる所は少ない。ソヴィエト＝Советы рабочих и солдатских депутатов をさすと思われる用語として「労働者代表委員」（『東日』三月一八日）「労働代表会議」（『東朝』三月二一日）「労働者及兵士団体委員会」（『東日』三月二四日）という用語がでているが実態については全く分っていない。ソヴィエトについて比較的正確な理解のもとに訳した例としては『時事新報』特派員播磨樽吉で「労働者及び兵卒代表者評議会」として四月七日付『時事』にみることができる。[15]高畠は『新社会』五月号で彼のいう「労働者兵卒連合委員会」について、これは「直接革命に参与せる労働者及び軍隊より選出せる代表の会議」であって「元来、今度の革命の中堅は兵士及び労働者の一団であって、彼等は実に革命

の最大殊勲者たるべき名誉を担っている」としている。またソヴィエトを「政府以上の政府」として、臨時政府との二重権力をはっきり理解していないにせよ、これがブルジョア政府以上の底力を持つことを認めている。この高畠の論稿の示唆もあってか、前記播磨樽吉は『東洋経済新報』五月二五日号で、より正確な解説をしているが、このように日本人にソヴィエトの名称や本質が分るには、二カ月あまりもかかっている。ボルシェヴィキでさえ、レーニンの「四月テーゼ」がでるまでは二重権力の問題や革命の平和的発展の戦術の十分な理解には達していないのであるから無理もないといえよう。

高畠はまた、当時の新聞論調が「今回の革命は親独官僚に対する、排独主義人民運動の勝利であって、共和説や即時平和説の如きは途中より生じたる副産物にすぎぬ」との論を批判し、これは「革命の傍系たる立憲民主党の一派」(カデット)の議論をうのみにしたもので、社会党を始めとする労働者と軍隊が革命の中枢となっている事実をみれば、共和説、非戦主義は副産物ではなくて必然として理解されることを説く。

六月号ではこの三月革命が「革命の一歩であって、決して革命の完成でない」ことを立証する。「露国の政争は今や独探征伐を口実とする官僚対人民の革命から、国際平和主義を目的とする紳士閥対平民階級の革命に一転しつつある。臨時政府の中堅たる紳士閥(立憲君主党、立憲民主党)の目から見れば、革命はもう首尾よく親独派官僚を一掃した。此上は只、連合国と力を協せて其共同の敵たる独逸を倒せば善い。即ち彼等に取って、革命は既に完成したのである。国民は之により一切内顧の疑惧を捨てて、須らく共同の外敵に目を転ずべしと云うことになる。けれども……革命の事実上の中堅たる労働者兵卒の立場から云えば、成るほど官僚の倒壊は大に祝すべきことである。けれども親独派の一掃云々は彼らの最初より重きを置かぬ所であった。彼等は只自由を標榜して官僚を倒したと同じ意味を以て其人民内の仇敵を倒さねばならぬ」と三月革命から十一月革命への必然を予言する。同じ号に堺は「無政府主義者(?)レーニンは極端なる平和主義者」と記しているが高畠の理解には及ぶべくもない。

高畠はひきつづき八月号においては、メンシェヴィキと

ボルシェヴィキの政治綱領の相違を紹介し、レーニンは無政府党ではなく社民党左派であることを指摘、九月号ではケレンスキーの臨時政府が「帝国主義とつかず社会主義とつかず、主戦論とつかず、平和論とつかぬ……変ちきりんな内閣」だから「いつまで続く訳のものでもない」し他方レーニン派は今後、ますます増大していくであろうと書いている。また十月社会主義革命の報が入った直後の一一月号には、ケレンスキーの失脚を論じ「露都はボリシェヴィキーの天下と化した。露国革命は最初より労働者兵卒の事業であった。平民階級の事業であった」。ケレンスキーも平民階級をバックとしたが、彼は「労兵団を踏台として紳士閥と握手した。かくて彼は事毎に労兵団の反感を買った。彼の失脚は当然である。小気味よき末路である」として世界最初のプロレタリア革命への賞讃をおしまなかった。そしてこの号では、ボルシェヴィキの語義、その史的経移、ロシアの社会党と革命党（エス・エル）のちがい、および「今度、露都騒乱の中心人物となった」トロツキーの紹介、また翌一二月号では「レーニンの露国革命観」として、レーニンの「社会排外」主義批判、およびヨーロッパへの連続革命を指向する世界革命戦略を紹介し、レーニンの立場は「今回の革命を以て直ちに社会主義の実現を期することでなくて、社会主義の実現に必要なる一切の予備条件を造出しやう」とするもので「彼れの社会民主主義はマルクス説にシンジカリズムを注入し、それに加ふるに露国独特の土地革命を以てしたもの」で、この点で彼は目的のためのあらゆるものを利用する「実に徹底した実際家」「レヴォリューショナリ、オポルチュニスト（革命的融通主義者）」というべきもの、としている。そして十月革命成功の報の入った直後、彼は堺と連名でレーニンや第二インターナショナル本部に手紙を寄せ、この世界史的意義を有する革命への連帯を表明した。[16]

高畠のロシア革命の紹介は、以上にみたように当時の社会主義者の中では一頭ぬきんでていたものであったが、重要なことはこのロシア革命理解と、サンディカリズム批判の展開、国家社会主義運動の開始は高畠において不可欠のものであったことである。国家社会主義運動を開始した直後、高畠はその「過激派」の把握を次のようにまとめている。[17]

①無政府主義に対する国家主義として。ボルシェヴィキは「労働者階級の覇権に依って、其生産機関公有の目的を貫徹しやう」とする点で必然的に「国家を社会の否定と見ずに、社会進化の必然的に経過すべき内発的一段階と見る」のであるから、この点こそ「実にボリシェキーズムと無政府主義との根本的差異であって、レーニンが『我々と無政府主義との差異は、我々が発展の為に国家の必要を承認する点にある』と言ったのは正に此点を指したものである。」

②それは「武装した労働者の政権獲得を主張」する点でサンディカリズムの経済運動に対する政治運動であること。

③この点が重要なことだが、社会民主主義が本質的に議会政策論であるに対し、ボルシェヴィキの政治運動は直接行動であって、此点では、「社会民主主義よりもサンディカリズムに近い」が、後者のそれは経済的であるのに反しボルシェヴィキのは「政治的（即ち政権掌握を目的とするもの）」であって、ここで高畠はボルシェヴィキを、あの明治以来の日本社会主義の最大の論点であった「議会政策」か「直接行動」かの議論の止揚者として捉えているかの如くである。

④「社会民主主義がデモクラシーを重んずるに反して、ボリシェキーズムは非デモクラシイ、或は反デモクラシイの傾向を帯びている事」で、この点ではボリシェヴィキはツァーリと変るところはない、という。

従って、この論文を書いた当時、始めたばかりの国家社会主義運動とボリシェヴィキを対比すれば、帝政廃止と忠君愛国という相違点はあるにせよ「頗る似寄った点」を三点指摘する。「其一は公有主義実現の手段として国家の中央集力を極度に重要視すること。其二は労働組合運動、労働立法等に依る改良的応急政策に熱中せざること。其三は社会主義の立場に於て、謂ゆるデモクラシイに重きを置かず、場合に依っては之れに反対しても可なりと信ずること」つまり国家利用、反改良主義、非デモクラシーを、その共通点と見たのである。この前、一九一八年一一月の『新社会』誌上において露独革命の性格を比較し、ドイツはロシアに比し革命難く建設容易であるが、それはドイツには「社会主義の重要準備たる国家的施設が発達」しているからであると説明している。遠藤友四郎も同じ号で同趣

旨のことを述べている[18]ので、ロシア革命、ボリシェヴィキに対する以上のような理解の上にたって日本社会主義運動に強い影をおとしている直接行動論的発想を脱却せんとしたのが、彼らの国家社会主義運動の当初の発想といえよう。

高畠はさらに一九二一年に入って『解放』誌上に、彼のロシア革命観についての総括的論文を発表する[19]。即ちロシア革命は「社会的の生産力が充分に発達した後でなければ、決して実現されうるものではない」ところの「社会的革命」ではなく「社会的革命の進行を妨害する有産階級の……『頑強なる態度』を抑圧せんとした」もの、即ち社会的革命の必要条件を作りだす「政治的革命」であった。つまりロシア革命は共産党独裁をうちたてることにより経済的搾取制度の廃絶をしたが、同時に経済的搾取のない純粋な政治支配をうちたて国家権力を強化した。従って高畠にとっては「社会主義制度が実現される（＝社会的革命）為には……国家権力の確立（＝政治的革命）を前提としなければならぬ[20]」（カッコ内引用者）のである。

この認識は単にロシア革命の結果生起した権力についてのみいいうることではなく、マルクスの理論体系の必然的帰結としてあるのである。「マルクス主義は元来国家主義である。生産を集中させて、さふして此集合した大きな生産組織の下に一般経済を行ふということは、どうしても国家主義、大きく集中した権力と云ふものを仮定せずには考へられない[21]」「政治上の権力が無政府にまで雲散霧消された状態の下に如何にして集中経済を運用し得るか[22]」そんなことは夢物語としか高畠には考えられない。従って彼のこの頃の最大の仕事である『資本論』の翻訳も「右翼反動の国家主義者」にとって決して矛盾したものではない。まさに彼は自己の理論的裏づけをマルクス主義の本質と彼において観念された国家主義に求めたのであり[23]、また「労農共産主義はマルクス派社会主義の正系を以て任ずるものであり、マルクス派社会主義の徹底に外ならない[24]」として、ソヴィエト国家も自己の理論＝「マルクス理論」の実体化と観念したのであった。大杉栄がロシア革命を無政府主義の立場から「為されてはいけない」標本であるとする有名な一句があるが[25]、大杉は革命の結果できあがった権力がプロレタリア独裁に裏づけられた強大な国家の構築となっていったことにふれているのは明らかだが、この事実認識は、

社会主義制度実現のために国家が不可欠である現実の標本とした高畠のソヴィエト国家観と照応しているのである。

高畠がロシア革命を自己の理論的裏づけとしていかに力強く感じたかは、次の近藤憲二の回顧録によく表われている。[26] 一九一八年四月、福田狂二宅で開かれた「ロシア革命記念会」、社会主義者の内輪の集まりにしては「珍らしい盛会」の四〇名ほどが出席、堺・大杉・荒畑・高畠と各派の陣容がそろっている。「そのころ高畠は、ロシアに第一次革命が起きればケレンスキーを謳歌し、第二次革命が起きればレーニンを讃美し、ともかくもアナーキズムでもサンズカリズムでもない革命が成就されたことで大いに気をよくし、意気軒昂だった時代なので、その日も主役であった。大杉が立ってひとくさりロシア革命の批評をやったあとで『過激派の戦術はアナーキズムの戦術だ』というと、高畠は『しかし独裁はちがうだろう』と弥次った。大杉が初期のアナーキストのなかには独裁を主張したものもあると答えると『いや、これは聞きものだ、そこを詳しく一丁やってくれ』……」高畠の意気荒いさまがうかがえる。

＊　＊　＊

一九一七年のロシア革命の報から一九年の国家社会主義運動の開始＝売文社の分裂に至る中間の一九一八年、見落してはならぬものとしてこの年の『新社会』二月号に高畠が提起し主として山川を相手とする「政治運動と経済運動」をめぐる論争がある。この一文において高畠は山川・荒畑などサンディカリズム的傾向の顕著な者だけでなく、かつて『東北評論』時代の自分自身をまきこんだ日本社会主義者の支配的な固定観念――「政治運動即議会政策、経済運動即直接行動」という図式――を打破せんとする。

「議会政策は政治運動の一部であるが、決して其全部ではない。……苟も労働者の政権獲得を、労働政府の確立を、新社会実現の有効手段と信じ、此目的に向って行動する運動は悉くみな政治運動である。」だとすればあたかも経済運動が「ゴムパースからヘイウッドまでを含む」のと同じく政治運動も「シャイデマンからレーニンまでをふくむ」多様さをもつことは当然ということになる。さらに五月号では議会政策の修正案として労働者の政権獲得のために提出された戦術はたんにサンディカリズムのみでないことをより具体的に開陳する。「独逸のリープクネヒト・メーリ

ング、ローザルクセンブルグ、和蘭のヘルマン・ゴルテル、パンネック、墺太利のラデーク、フランツ・アドレル、露国のレーニン、トロツキィ等に依って代表せられる左翼社会民主党、マッセンアクチョニスト、或は近頃八釜しいボルシェキキイと称する一派」などすべて新しい「政治運動」の担い手として提出されている。何よりもロシアの世界最初のプロレタリア革命がサンディカリズムではない。政権獲得を目的とする「政治運動」――しかも「議会政策」とは同義ではないそれ――によってなされたことは高畠の自信を深めさせた。「ボリシェキキイはサンディカリストではない。……彼等が如何に政権獲立を重要視するかは、最近レーニンが『資本主義から社会主義に至る過渡期には、先づ労働階級の独裁政府が必要である』と云った一語に依っても知られる、……露国過激派政府と欧米各国の紳士閥政府との間に、政府としての本質上左程に著しい差異があるようにも思われぬ。何づれも強権に立脚している。只、其強権が紳士閥の手になくて、労働階級の手にあると云ふ一点が根本の差異である。」[20]

この高畠の議論を正面から受けた山川は、同じ五月号において「社会主義者の間で経済運動を政治運動に対立させる時には、それは決して総ての政治運動と総ての経済運動を含めた意味ではない。」高畠のいうように議会政策即政治運動とするのは不正確かもしれぬが「歴史的に生れた用語は皆不正確である。」問題は抽象的にでなく具体的に考える必要がある。「学理上から動植物界の差別を徹廃したことは、必ずしも現に動植物界にある差別という事実を徹廃したものではない。それと同じく理論の上から政治運動と経済運動との差別を徹廃したからとて実際の運動の上に、此二つの思想が相争うという事実を抹殺することはできない。」社会党の政治運動は議会政策でありその破綻の対策として出されたのが「資本制度の撤廃と階級的自覚の上に立ちつつ経済運動を主張する労働組合主義」＝サンディカリズムなのだからこの方が「非妥協的」であり、「社会党堕落の原因は唯々多くの投票を掻き集めんとしたる為」という十年来の議議をくりかえすのみで、高畠にしても社会主義者の実践的運動の基盤がない中では不毛であるとして、十分に問題をにつめることなく論争をうちきったのでせっかくの高畠提言も十分な積極性を持つに至らずに終ってし

まった。この直後、山川・荒畑は『青服』筆禍事件で下獄し、その間に売文社の分裂と高畠の国家主義運動が開始されるに至って、政治運動は堕落という先入観に立つ社会主義者にはいっそうの逆効果をもたらしてしまい、彼らのサンディカリズムからの脱却は一九二二年の山川「方向転換」論まで待たねばならなくなる。しかし山川方向転換論の内容の多くは一九一九年の段階における高畠提言の事実上の採用であり、[28]高畠が「直接行動」論の止揚＝日本社会主義史上における「明治の終焉」をめざしていたことを考慮されねばならぬ。後年高畠はこの頃を回想して次のように述べている。

当時の日本の社会主義者の大部分の傾向は一言にしていえば無政府主義であつた。国家や権力、進んでは政治一般と云ふものは悉くブルジョアの道徳若しくは機関であるとの意味で見て居った。……つまり当時多数の社会主義者は経済論の観念ではマルキシズムであつて政治上の観念ではアナアキストであつた。是が私の一般社会主義者とどうしても相容れないやうに感じて居つた点である。尤も、其後露国に革命が行はれて、一切の権力を社会主義者が無視するのは悪いと云ふ観念が一般的に行はれるやうになつた。……私から見れば寧ろ痛快である。それ見たことかといふ気がした。[29]

Ⅱ　売文社分裂、『国家社会主義』の創刊

高畠らの国家社会主義運動開始のプロセスをもう少し具体的に見ていこう。山川・荒畑らが『青服』筆禍事件で下獄したのは一九一八年一一月であるが高畠らの「売文社乗っとり運動」はこの直後顕在化する。[30]

一九一八年春、売文社には新しいメンバーが多く参加してきた。高畠の同志社以来の仲間遠藤友四郎、『第三帝国』で活躍していた北原龍雄、早稲田を出たばかりの青年尾崎士郎、茂木久平らである。そして五月より『新社会』編集名義人には高畠、その経営の実権は北原となっている。ある意味ではルーズで放漫的な性格の人物の多いこの頃の社会主義者の中で几帳面な高畠はその学識と共に若い同志の信望を集めつつあり、[31]遠藤は八月号の「親分子分論」と題する長文で「メッキリ親分らしくなった高畠」を讃え、高畠もそれをうけとめる形で徐々に売文社内の私党的結集をはかっていくようになる。後の国家社会主義運動のメンバ

ーの一人、小栗慶太郎は当時を回顧し、自分たちと高畠の間には「理屈を超えたあるつながり」を感じたし「主義主張によって共鳴するというような水臭い関係でなかったところに、吾々一団の強味があるのだ」と語っている。[22]

同時にこの頃、陸軍中将佐藤綱次郎や満川亀太郎ら「皇室社会主義の気分が著るしく漲っている」老壮会に出席し、同じ頃福田徳三を介して黎明会加入を申込み断わられているが高畠は両者を比較し「牛の涎のの如くダラダラと締りのない『民本主義』の吉野、木村某々輩よりも気は虹の如き錦の御旗を押立てて猛然社会主義に邁進するをも厭わざらんとする佐藤中将、宮嶋大八氏等の『国家社会主義』にヨリ多く共鳴を感ずることを公言するに否ならざる者である」と宣言する。[23]この頃の『新社会』は事実上高畠派の新しくうちだした国家社会主義の理論機関誌たるの観を呈するに至った。遠藤は同じ二月号に「君主社会主義の実行をすすむ」と題して彼らの立場を説明する。「私は権力階級の人々にたいして、まず社会主義に注目し、そうしてこれが援用に努力せんことを望む。民衆の反抗があっておこなわれる社会主義は民主的である。その実現をさけよ。国家が平和の裡にもたらすところの社会主義は君主的または国本的である。これが実行をはかれ。君主社会主義は民主社会主義と其の基礎を異にし、国家を破壊することなく、皇室を奉載して、以て民衆を随喜せしむる。」云々。

果して、この遠藤の「天皇の御名により、国家をして社会主義を実行せしめよ」という思いきった主張は多大の反響を呼び、従来の社会主義中央機関誌的役割を果してきた『新社会』の根本的な性格の変化であったので、読者からの投書も多数届いたが、それは「毀貶七分の誉褒三分」[24]というところであった。具体的に表面化した事態は、高畠の遠藤への書簡によると、従来『新社会』への毎月五円の補助金を出していた山崎今朝弥の中止申出となり、堺も高畠らがこれ以上積極的に出ては売文社を解散することを示唆した。高畠はこれをむしろ積極的に受けて、『新社会』の名義は堺に、売文社の社名は高畠にひきついで「売文社の革命は流血の惨事を湧出することなしに成就」し、高畠らは一九一九年四月『国家社会主義』創刊号を出すに至る。[25]

高畠らの分裂については、山川対高畠のライバル意識の生みだした「日本社会主義者中の暗闘史」という、うがっ

た見方もあるが、[26] それは一面の真実にせよ、高畠自身は山川・荒畑の政治運動否定のサンディカリズムでは運動の実体化は不可能であるし、堺のように「山の上から下りて行って実際運動をするのはまだ早い、我々にはまだ山の中に籠って居る方が得策だ」ということでは、いつまでたっても「冬の時代」を脱却できない。この頃、売文社内にはマルクスと共にカール・リープクネヒトの像がかかっているが、リープクネヒトを高畠が愛したのは、その実行力に富んだ点であった。[27] 〈大衆運動〉の追及、現在できうる可能な形態の模索が老壮会への参加から国家社会主義の提唱となっていったのである。当時の売文社の若手の一人で高畠と行動を共にした尾崎士郎は、その自伝的小説『時は夢なり』(一九五七年)でこの点に関し次のような興味ある対話を載せている。長文をいとわず引用してみよう(傍点引用者)。

「ところで、改めて君に聴くが、君はいったい、右翼なのか、それとも左翼なのか」

「それは」

狭間(尾崎)は、このとうとつな質問の意味を理解することができなかった。返事に躊躇している狭間をみると、畠山(高畠)は、急に、にやにや笑いながら

「つまり、こういう世の中では、急進的な左傾派ほど、その実、観念的な妥協派なのだ。今、僕等の前には二つの道しかない。テロリズムか、国家社会主義か——それ以外のものはことごとく微温的な妥協派なのだ。実際的な効果の前には何ものと妥協することをも辞さない僕等こそもっとも徹底的な非妥協派なのだ。そして僕等は、一歩前に踏みだすことが必要なのだ。それがためには議会政策もまた辞するところでない。」

「すると思想をカムフラージュして行動するということになるんですか?」

「ところが、カムフラージュしているぞ、と叫びながらやっていたんじゃ仕方ないからな。妥協はむしろ積極的でなければならぬ。僕は一切のハンディキャップをしりぞけて積極的妥協説を主張する。」

畠山はまるで人が変ったように一人でまくしたてた。

「そこで、君にきくがね、例えば僕が日本の軍閥と提携したとする。こいつはどっちか」狭間はだんだん、教師の前でメンタルテストをうけているような気持になってきた。

「どっちかというのは?」

「消極的か積極的かということさ」

「もちろん積極的です」
「よし、じゃあ、僕が普通選挙の運動をはじめたとする、これはどっちだ？」
「そいつは運動のはじめ方によりますね、妥協の対象が問題じゃないんだから」
「すると君の論法でゆくと、運動のはじめ方さへよければいいわけだな」
「いや、そんな、僕は」
「そこでさ」
畠山は上体をぐっと反りかえらせた。
「僕はこう思うんだ。実際運動には妥協もなければ非妥協もない。だからもちろん消極も積極もない。――問題はただ、こんな時代的空気の中で、われわれがどこまで巧みに変装することができるのか、というところにある。例えば今日、アナキストから見たマルクス派は右党だが、マルクス派から見た議会政策派はもっと右党だ。そこで奴等は、いま同じように、微温的という言葉を浴せかけて批難しあっているが、しかし時代が変ってきたらこんどはアナキストがいちばん微温的になるかも知れん。とにかく理論は理論だ、運動は臨機応変でなければならん、と僕は思うんだが」畠山の眼が正面から狭間の顔を睨み据えている。
「われわれに必要なのは理論じゃなくて、若さなのだ」
「そうです」
「そこでだ。僕は泉（堺）先生に向って進んで絶縁状をたたきつけようと思っているんだが」畠山の顔は、みるみるうちに生彩にあふれてきた。……

ここで高畠のいう「理論は理論だ、運動は臨機応変で」「若さで」という表現にはプラグマチックな響きが聞こえるが、一方では米騒動の勃発や友愛会の発展をみながら腰をあげぬ堺への不満、他方で個人的激発や観念的な「工場占拠」のアナーキズム・サンディカリズムの、社会のアウトローの不満の表現者であっても大衆運動の組織者たりえぬ大杉や山川らの同志たちへの批判が国家社会主義運動へその突破口を見つけださせたのである。そこでは「カムフラージュ」という表現を額面通り受けとるかは別として、とにかく実際運動の可能を保障するためある意味では「穏健さ」を売りものにするのが彼らの運動の基調ともなったのである。

＊　＊　＊

『国家社会主義』はその創刊号を一九一九年四月に出し

た。菊版六〇頁、一部二〇銭、さしあたって刷った二千部は何んとかさばける予定であったらしい（創刊号は発禁＝後述）。ほぼ『新社会』と同規模で、各界の反響も彼らを満足させるに足るものといえよう。創刊号「編集者より」欄にあげられた批評をよせた人々の名前には島中雄三・河上肇・室伏高信・布施辰治など文壇で活躍中の評論家、大学教授、馬場孤蝶・山崎今朝弥・宮嶋資夫・吉川守邦らかつての売文社、およびその周辺のグループ、満川亀太郎・江藤狄嶺・佐藤鋼次郎ら老壮会の面々、それに面白いのは大逆事件前後よりすっかり社会主義運動から足を洗った木下尚江・西川光次郎の名があがっている。とくに西川は数年前「社会主義者のワビ証文」と呼ばれた転向声明書『心懐語』を著わし、岡田式正坐法などにこっていたが、高畠らの運動には積極的に協力し、彼らの「国家社会主義講演会」にはしばしば講師として演壇に登場している。その他珍らしいところでは与謝野晶子などの名がみえる。

創刊号において高畠は「国家社会主義の色わけ」と題する小文で他の潮流から自らを区別する。彼によれば「国家に依って」という点ではマルクス派社会主義も、社会改良主義も、国家社会主義も変りはなく、この点で無政府主義と一線を画されるのだが、改良主義はその中に「国家の為に」という意味をふくませている点で他の二者とは区別される。そして我々は「資本労働の調和を斥け、国有主義を実行しやうとする点に於て、マルクス主義と全く立場を同じくするもの」だが、他方「社会主義を国家の為に、国家の手で行はうとする所は、趣旨に於て社会改良主義と共通した点がある」という。「つまり我々の立場は、経済上にはマルクス主義を応用し、政治上には社会改良主義の精神で行かう」というもの、「社会主義と国家主義の結合」「大和魂にマルクスの智慧を注入したもの」なのだ。若き日、前橋中学時代の彼が、大和魂にキリスト教を接木し〝新日本主義〟の理想を唱えたその精神をおもいださせる。[33] ただ遠藤のように「皇室」「天皇」という概念を使っていないことは考慮しておく必要がある。[34]

続く巻頭論文「労働者に国家あらしめよ—国家社会主義の理論的根拠」ではさらに具体的にその論理展開を試みている。

我々の国家社会主義は何を意味するか、我々は労資の対立、

資本主義の存在が国家滅亡の必然的原因であることを強調する。同時に又労資の調和が絶対に不可能であることを主張する。而も国家の維持発展は我々にとつて何者にも換へ難き熱願でなくてはならぬ。我々は資本主義を憎むに非らず、国家をヨリ多く愛するのだ。国家の為には一切を犠牲とするも敢て持せ（ママ）ないのである。茲に於て、我々の到達すべき道は一あるのみ。曰く、資本主義の撤廃これである。資本、労働の対立を不要ならしむる、愛国的経済組織の樹立これである。

立論の前提は、国家と生産機関の少数特権者への壟断から、国民のための国家の奪還という、明治以来の国家社会主義論の基本的立論を踏襲している。したがって労資協調排斥、資本主義の撤廃あるのみだが、それは「社会主義の為に国家を利用するのでなく、国家の為に社会主義を利用する」ことにあるのであり、要求貫徹の手段は極力非合法手段をさけること、具体的には普選要求が当面の実行要求としてしぼられる。逆に労働者の経済運動、組合運動による利益幸福はすべて国家社会主義の実現により包括されるとして、その独自的意義には消極的である。さらにマルクス派社会主義については「多大の尊敬を惜しむものでない」が、その万国主義も、ソヴィエト国家の建設過程においては容易に国家社会主義を超えることはできないとして、前述のようにロシア革命を自身の理論的補強とみなしていくのである。[40]

ただ、これらの論文には〈実行運動〉を可能にするために意識的に「穏健さ」を前面にうちだしたという側面があり、同人の遠藤などはもっぱらこの点での弁明役として、我々のような「忠君愛国者」の取締などという国費のムダ使いをやめ「其の穏当なる者に対して取締を解放」せよ、そうすれば「危険なる主義者」もやはり「社会進化の理法」によって「私たちのやうに」穏当になるはずだ、と頻りに自分たちが「危険でない」ことを強調している。[41]

遠藤の所説は、ちょうどこの頃（一九一九年三月一一日）衆議院での鈴木富士弥代議士の質問演説に触発され呼応したもので、鈴木演説は日本官憲の社会主義取締の苛酷さは世界無比であり、それは帝国の一大汚辱で、却って帝国の存立をあやうくすることとなる因であるから、社会主義者の「所在の黒白を甄別し」「其の穏当なる者に対しては断乎取締を解放し、自由討究と自由宣伝との余地を与へ」るべき

である、というものであった。この鈴木演説の行なわれた第四一議会は、前年の米騒動のあとをうけた原内閣の下、選挙法改正が最大の問題となっていた。この年の友愛会七周年大会は、理事による合議制、会長の公選、会名変更、綱領変更等友愛会の労働組合への脱皮の画期的大会であった。それはさらにＩＬＯ労働者代表の官選代表反対の猛運動に開花し、友愛会は「熔鉱炉の火は消えたり」の八幡製鉄所大争議を始めとする労働組合の戦闘的運動を指導、介入していく。そして政府は新たな労資協調団体として協調会を設立（一九一九年一二月）せねばならなかった。鈴木演説はこのような背景をもって出現したのであり、高畠らの「実行運動」もそうした気運に乗って開始されねばならぬはずであった。

ところが、このようにして合法運動開始の模索も皮肉な結果となる。『国家社会主義』は早々に発禁となり、その理由が当の遠藤のもう一つの論文「国家社会主義の実行と農工業」で、内容は、緊急勅令による普選実施、天皇の根本的新政策実行の布告による国家社会主義の実行を説いたものだったが、「危険でない」事を自称する当人の論文により発禁という皮肉は一同を意気消沈させるに十分であった。「穏当さ」合法主義をキャッチ・フレーズとする彼らの運動の性格から、一たび官憲により禁止されると全く手も足もでない、という弱さを露呈する。彼らは方針を一変して啓蒙と宣伝に重点を移し、国家社会主義講演会の開催[42]、〃社会主義叢書[43]〃の計画、『国家社会主義』誌上における研究論文の発表に意をそそいでいく。なかでも「第二師団経理部」という軍隊の公式機関からの注文[44]は彼らを喜ばせた。しかし財政難もあってこの雑誌は五号で廃刊、同人一同大へんな意気ごみで出発したものの「それやこれやで、折角の船出も間もなく気抜けがして、尾崎君は病院に逃避し、茂木君は去って自由協会を造りと云ふふうにだんだん影がうすくなって来た[45]」し、運動が印刷物による宣伝と講演会以外に不可能だということは高畠を書斎にとじこめることを多くし、彼は「資本論の牢獄」の中でかの大著の翻訳に専念することになるのである。

しかし彼らが堺らと異なって執拗に実行運動を追及していこうとした中には、大正期の日本にひろがった社会状況の変化に社会主義者としていかに対応するか、という模索

があった。その社会状況の変化とは、一言でいえば大正デモクラシー状況をささえている応範な大衆の登場ということである。あの明治社会主義の最大の担い手幸徳秋水が、その著『廿世紀之怪物帝国主義』の末尾において「社会改革の健児として国家の良医を以て任するの志士義人は宣しく大いに奮起す可きの時に非ずや」と呼びかけたような、一部の志士仁人の先進的行動による大衆の救済という形でなく、一つの社会勢力として、主体者としての「大衆」の登場ということに注目しようとした点でも高島はサンディカリズム批判と並んで、明治社会主義の伝統の断続を意企したものであった。のちの彼らの同人たちの結社が「大衆社」であり、その機関紙が『大衆運動』であったこともこの点から象徴的である。

彼の「大衆」概念とは、例えば「大衆的前衛党」という場合のような単なる量的側面をいうのではない。それは現代社会学でいう「マス」という意味に近いものである。例えば関東大震災においての民衆の「不逞漢来襲に対する自発的自警」をもって、その民衆の自発性を朝鮮人に対する帝国主義本国人民の虚偽意識とはみずに、むしろ「大衆の胸底には愛国の至情が燃えている」[16]と記す高島は「大衆のナショナリズム」の時代（E・H・カー）において大衆心理を支配する両極、即ち一方では帝国主義段階のブルジョア体制の下で没落の不安にさらされる賃労働者が「統合」される願望の表現として国家主義を求め、他方その中での「平等」を求めて社会主義へ向かうという二つの側面を考え、その両者を大衆の「本能的心理」としての「愛国心」と把えたのではないだろうか。そして「統合」と「平等」を指向する大衆の要求を統一的に解決し、マスとしての大衆の二つの矛盾した面を集約しうるものとしては「国家社会主義」理論しかありえない、とされたのである。ここから出される彼らのメインスローガンは「真の国家主義者たるものは必ず社会主義でなければならず、真の社会主義者は必ず国家主義者でなければならない」[17]ということであらねばならなかった。そして、この論理の正当性のためには〈国家＝階級抑圧機関、搾取機関〉という図式を改めること、全国民を「統合」するための超階級的性格を国家がおびうることが論証されねばならない。「国家＝統制機関」論はここから出現する。

Ⅲ　高畠の国家論、プロレタリア国家論

高畠の国家論と正統マルクス主義のそれとの基本的相異は「国家＝搾取・抑圧機関」説およびそこから結論されてくる階級社会の廃絶の段階における、「国家死滅」説に対する正面からの批判である。それは「統合」と「平等」を求める大衆心理に答える解放の理論の創出という現実的必要からもたらされたものであった。昭和二年二月八日の日付をもつ高畠著『マルクシズムと国家主義』序文は、国家論解明に苦闘する彼の心情を次のように述べている。

プロレタリアの現実的覇権進出は、マルキシスト学界に対しても国家論をその最重要研究主題たらしめた。……国家論の悶えは、時代の懐みであると同時に、またマルキシズムの魅惑を思ひ切れない著者の国家社会主義の懐みでもある。国家社会主義理論の完成は、著者一代のもがきである。今は、このもがきの片鱗を以て、応急の刺胳と自慰する外はない。

彼の国家論の論理構成を検討してみよう。[48] 一言でいえば「支配」機能を超歴史的概念にすえて国家の永遠性を説く。即ち生物は生存のために自己保存本能を有するが、これが無秩序に発揮されると弱肉強食の滲たんたる世界となって自己保存の目的は達せられない。そのため、当初は外敵から守るための集団の利用という形で自己保存本能の一形態として形成された社会的結合が、集団内での統制機能の性格を帯びてくる。とくに人類においては猜疑心、優勝欲をふくむ複雑なエゴイズムが顕著であるからそれは一層促進される。ここでいう統制機能とは、現代の社会でもみられる「右側通行」とか、大勢の人がつめかける時、「順序よく並んで」事を行うとかいった経済的搾取関係とは直接の連関性を持たないものである。そして人間社会の複雑化と共に支配、統制機能が一定の社会群に分化・独立して担われていくようになり、人間の優勝欲がさらにそれを促進するが、これらの分化は搾取関係のない原始社会から存在する。つまり「支配は搾取に先行」して存在する。さらにこの機能の分化を総括的にしたのは種族対種族の衝突と、その結果の被支配階級の形成であって「支配階級が斯く階級によって担任される社会を国家という」のである。この場合征服者が被征服者を奴隷とした場合には、支配階級が同時に搾取階級となっていくし「歴史上の国家は大抵これを

兼ねている」が、それは必ずしも必然不可避とはかぎらず、階級成立の原因は支配機能の分化に由来する。従って一切の国家が統制機能と搾取機能とをあわせもつ必要はない。しかも人間の優勝欲とエゴイズムのあるかぎり「支配は永遠」に必要であるからこれを認めて国家から搾取を除去し「国家を支配体そのものとして完全ならしめん」とするものが国家社会主義なのである。

国家の本質を「支配・統制」においた高畠は、その支配者としての人傑の欠如が個人主義の発達をもたらし、デモクラシーをもたらしたが、それも本質的には少数政治・幹部政治と判断する。「支配」とは少数者のものであることが本質であるからデモクラシーかオートクラシイかは支配の発現形態の相違であっても本質的区別ではない。だから「節制あるデモクラシー国民は、デモクラシーの本分的限界を忘れないから、議会政治を葬むる必要をも感じない。デモクラシーをオートクラシイの仮面として利用する国民のみが、議会政治を無難に維持し得るのである。」[49] だから高畠はヨーロッパ近代政治思想家の中で、マキァベリ、ホッブスに対する多大の共感をよせる。[50] マキァベリは「現実の生きた政治を直視」しえた思想家であって、支配統制が政治の目的なら、その目的に役立つものすべてを善とする。その現実主義、権力としての国家の直視、性悪論に共感をよせる。またホッブスにおいては絶対国家が唯一の支配者たるべきものであるから、奸商・特権資本家など国家の中に国家以外の支配者があってはならないとしたが、この論をつきつめていけば国家社会主義に向う、として高い評価を与える。

ここで気のつくのは、高畠の国家論の基底にある人間本性に対する性悪論的評価、ペシミスティックなリアリティである。またこれが実はマルクス主義への懐疑の一つのモチーフをなしていると思われる。例えば「マルクスの国家観は……人間性ならびに人間社会の理解においても、なおいまだ無政府主義の楽天的ユートピズムから全然脱却するまでに至っておらない。マルクス主義の現実的、宿命的、悪魔的、性悪観的傾向を採用して、その到達すべき最終点の帰結に徹底せしめるものは、即ちわれわれの国家社会主義である。社会主義思想上の現実主義的傾向は、われわれの国家社会主義において、その予定されたる究極の運命に

到達したものといいうる。[51]」彼の国家支配統制機能の永遠性とは、人間のエゴイズム調節機能の永遠性なのである。そして本来は人間の自由と平等を求める最も科学的方法としての社会主義は、高畠においては人間の邪悪性に対する統制機能としての国家を最も純粋に抽出するものとして理解されるのである。

このことから彼は、マルクス主義の〈無政府主義・国家社会主義両翼分化論〉とでもいうべきものをひきだしてくる。彼にとっては無政府主義とは二重の意味で楽観論である。クロポトキンの二著『相互扶助論』『田園、工場及作業場』に照応するように、人間の本性を愛他互譲の精神とする倫理上の楽観論、および旧制度覆滅後の社会の物質的生産力の無限の発達をとく経済上の楽観論であって、ここから社会には国家も法律もいらないという結論がでてくるのは自然である。しかるに共産主義は、これらの楽観論をとりつつも「プロレタリア国家」とか「権力」の必要をとくのは論理矛盾であって、この点では無政府主義の方がよほど論理一貫している。そして無政府主義の非科学性はその楽観論にあるのであって、人間の本性はエゴイズムであり、制度（生産関係）が変っても生産力がすぐ発達しはしない現状を見れば、これらの楽観論は排斥して国家社会主義で行かねばならない。共産主義はその間を彷徨するオポチュニストで、逆に、無政府主義については「それに共鳴したがる傾向も、私は多分に持っている。ネヂのかけ具合で私などは立派に無政府主義の信者になりうる素質だ」として、論理的一貫性を重んじる彼の姿を出している。[52]

さらに、この視点は自分たちを無政府主義に対置するのみならず、それまで日本に紹介されて来ている国家社会主義思想の代表とされていたラッサールなどとも区別される。ラッサールの主張は「人間の歴史は窮乏、無知、貧困、無力、自然と戦って、これを征服するの行程である。斯かる行程は……個別単独の力を以っては……できない。……結合の力によって獲得せしむるものが国家である」とする倫理的理想主義であり、無政府主義と共通する空想的地盤に立つものとされる。[53]高畠はラッサールの主張を「倫理的国家社会主義」と名づけ、自らの「機能的国家社会主義」と区別する。[54]あらゆる他の社会主義思想の空想性、観念性は彼にとって、人間のエゴイズムを認めないことによるの

であり、人性が悪だからこそ制度が必要である、というのがその国家社会主義論の底に流れるモチーフであった。

しかし、このような性悪観は国家社会主義理論に一般的というよりは、むしろ高畠独特のものといえる。高畠門下の一人津久井龍雄は高畠を評して「此の人には徒らに人のすることを批判するだけで自分で馬を陣頭に進める気魄が不足し、それに人間的に何か冷た過ぎるという印象も強かった。その理論も……理想主義的な要素が薄く、人間の性が悪だから国家が必要だといったひどく味も素ッ気もないものであった。」[65]と語っているが、しかしこの性悪観こそ後述するようなファナティックな国家主義、日本主義運動から一線を画する高畠国家社会主義運動の基調でもある。それは人間と国家への冷徹なリアリティをもった視点ともいえるし、熱狂主義・自己欺瞞・偽善を排斥した視点であるともいえる。そしてこれをつきつめるとニヒリズムへの傾向をおびてくる。ニヒリズムが、既成の巨大な体系にいどむ者の持つ破壊の思想に要請されがちの思想であるとすれば、高畠の次のような一句は、高畠思想がそのような破壊の思想の要素を胚胎していた例証となるだろうか。

どんな理論にしろ、性根のどこかに何ほどかのニヒリズムがないと本当に終りまで聴かせる魅力がつかない。社会主義にしろ、無政府主義にしろ、愛国主義にしろ、何主義でもよいが、性根の一角にニヒリズムをひそめない人間の議論くらい、その人間それ自身それ自身のごとく、噛んで索然たるものない。ニヒリズムのないニヒリストと称する人間の議論ときたら、これまた一段と困りものである。[66]

＊　＊　＊

以上のような国家観のもとに、高畠は「プロレタリア国家」論をめぐって、レーニン主義への挑戦を開始する。高畠が国家社会主義運動を開始したのはロシア革命のインパクトが大きな役割を果していることを先にみた。同時に、彼の「マルクス主義」国家論の精緻化は、すでに「死滅せざる労働者国家」として観念されてきたソヴィエト国家とレーニン国家論の批判を媒介としている。

高畠のプロレタリア国家論の本格的登場が一九二四年であることは示唆的である。[67]一九二二年の山川「方向転換」論は彼のサンジカリズム色の最終的払拭であり、また「アナ・ボル」論争の一応の結着、アナーキズムが日本社会運

動上の有力潮流からの脱落の時期であった。一九一八年段階での「政治運動と経済運動」をめぐる山川＝高畠論争は、山川「方向転換」論でもって、事実上、高畠の理論的卓越性を山川がみとめたことになり、以後当時の高畠理論の発展は山川に継承されたともいいうる程であるが、他方高畠はこの段階では一そう一純化」していた。ロシア革命と、そのプロ独裁理論を自己の国家社会主義論正当性の例証とした高畠は、次いで彼らのいう「共産主義の高度の段階での国家の死滅」論の矛盾を指摘しなければならなくなっている。

『急進』一九二四年九月号において高畠は、国家に対する無政府主義・マルクス主義・国家社会主義の態度を整理し、三者は共に「資本主義の中にふくまるべき国家」を否定せんとすることにおいては共通するが、前二者は資本主義の否定＝資本主義国家の否定、という「非国家的ユートピア」であるのに反し、我々は「資本主義を否定し、随って資本主義が国家を利用する関係を否定するが、国家その者は極力これを肯定し擁護」するものであり、この両者の中にあって「マルクス主義は、国家社会主義への降伏によって其現実主義的傾向を完成せしめられるか、又は無政府主義への陥没に依って其感情的空幻の傾向を徹底せしめられるかのヂレンマ的位置に立っている。マルクス主義の『プロレタリア国家』なる鵺的概念は、実際のところ此いずれかへの徹底を暗中模索しつつある苦闘の悲鳴と見ることができる」と、マルクス主義の最大の矛盾を「プロレタリア国家論」に焦点をすえて見んとする。

次いで一一月号の論文の副題には「石川準十郎君の暗示を得て」とあるが、石川論文とは同じ『急進』の一〇月号に載った「マルクス国家論に就ての一考察」と題するもので、石川はここで九月号の高畠論文をうけて「搾取と国家の可分性」という高畠国家論の有力な前提をプロレタリア国家論にその論証を求めている。即ちマルクスの「凡ての国家は階級搾取維持のための組織乃至機関なり」という全称命題と「或る国家（＝プロレタリア国家）は階級搾取廃止のための組織乃至機関なり」とする特殊命題は「共に真なるを得ず」で併立しえぬものである。プロレタリア国家とは、明らかに搾取のための国家ではないが、それはマルクス主義国家論の破綻の表れだというわけである。

これをうけついだ高畠は、エンゲルスの『反デューリング論』レーニン『国家と革命』に真向からとりくむ。即ちエンゲルスによれば、プロレタリア革命によって「国家としての国家を廃絶」するが、この瞬間において「最早特殊の圧伏権力たる国家を必要とする所の、圧伏せらるべき何ものも存在しない」こととなり「現実に於いて国家を全社会の代表者たらしむる最初の行為、換言すれば社会の名においてする生産機関の占取は、同時に又国家が国家としてする最後の独自的行為である。」こうして国家は「次第に不用となり、遂には寝入ってしまう」「国家は廃止されるのではなく、自滅するのである」[58]（傍点高畠）とあるが、国家は「廃絶」(aufheben) あるいは「廃止」(abschaffen) されたのちに「自滅」するというのは矛盾ではないか、と高畠は問題を投げかける。そして高畠のいう「社会党内のオポルチュニスト」であるレーニンらボルシェヴィキこそこの矛盾がボロを出さぬうちに理屈をつけたものが「プロレタリア国家」論だとする。

レーニンによれば「廃止」されるのはプロレタリア国家によるブルジョア国家の廃止であり「自滅」するのは、社会主義革命後のプロレタリア国家、というわけである。[59]「成る程、うまい解釈を与えたものだ……斯う解釈すると、真の国家は革命に依って廃止されるものであって、自滅するというのは実は真の国家ではなく国家の痕跡、又はホンノ国家らしい残骸だということになりはしないか。」ではエンゲルスのいう「国家としての国家」は一体どこにいってしまったのか。国家本質論をめぐる矛盾を指摘する中で、高畠は「レーニンの腹を割って見れば」次のようになるだろう。「即ちプロレタリア党が執権し、ブルヂョアを圧えつけて見たら厭応なしに又国家が出来てしまったのだ。……そこで『プロレタリア国家』という幽霊を担ぎ出したのだろう。……要するに『プロレタリア国家』という概念はエタイの知れないオバケである」と、彼流の解釈をしていく。[60]問題は用語の問題ではない。このことは「搾取が消えても国家はなくならないという非マルクス主義的現実と、国家は搾取手段の体現だというマルクス学説それ自身との大きな矛盾である。」だからこそ、マルクス主義はその「感情的空幻的傾向」を純化して無政府主義に行くか、あるいはその「現実的傾向をつきすすめて国家社会主義に行く

か」しかない。ここでもマルクス主義は「無政府主義・国家社会主義両翼分化」しなければならないし、高畠にとってマルクス主義の科学性を守ることは国家社会主義の道を進むこと以外にありえなかったのである。

かの地では、トロッキー追放劇と〈スターリン・ブハーリン時代〉を迎えていた一九二七年の高畠のソビィエト国家論[61]においては、「労農露西亜」も「燃ゆるが如き国家的野心を帝政以来植えつけられている」として「世界赤化」路線を国家的論理が必然的に要請する労農「帝国主義」としてとらえている。ソヴィエト国家が「国家」として強大になるのは当然である。なぜなら「苟くも独立の一国として優越の本能と燃ゆるが如き覇権を有する程のものは、みな結論において帝国主義的たることを避けえぬ。それは国家自我の実現と発展との努力に伴う必然的帰結だ。」

この論文では、西欧連続革命失敗後のコミンテルンが、アジアの民族解放闘争に乗りだしていることを指摘しているが、この「民族解放」も高畠の労農帝国主義論によれば「労農ロシアの奴隷・好餌」への道と片づけられるが、同時に高畠はそのような「帝国主義」国として世界政治の指導的一国に、国威の昂進をはかることに成功したレーニンを「愛国者」と呼んでいる。アジアの革命家たちは「労農ロシアに愛国者レーニンが出した如く……それ自身のムッソリーニを生み、ケマル・パシアを生むことに成功しない限り、たとえ列強帝国主義の羈絆からは首尾よく脱出しえたとしても遂には労農帝国主義の食い物となる運命を免れることは出来ぬであろう。」だからアジアの革命家たち（そして日本の共産主義者もそうであろうが）は「労農ロシアの奴隷たることに甘んずるが如き共産主義盲信の徒ではなく、労農ロシアの帝国主義的野心をも逆に利用して……国家確立の肥料たらしめんとする気魄と識見に富んだ純真の愛国者でなければならぬ」中国の国民党は独裁専政主義反対の立場から共産党に栖ついているが、独裁とかデモクラシーとかが問題ではない。「支那それ自身のための国民的国家の自主的確立」（傍点引用者）こそが肝要である、とするのである。

このように語る高畠を見るとき、一般的評価としてある「社会主義が主、国家主義が従」の特異な国家主義者、というのは甘いともいえる。しかしそれは高畠においては

「労農露西亜」こそが彼の国家社会主義を体現しなければならず、現実のロシアはその模索過程にある、という評価が媒介している。だからこそレーニンを「愛国者」と呼んだのであり、その究極は国家社会主義者なのである。しかし国家自我実現の指向が必然的に帝国主義的たることをまぬがれぬ、とする高畠の言葉は、あの三国干渉後の徳富蘇峰や、日露開戦を前に「乎は如何にして帝国主義の信者なる乎」と居直った山路愛山などと、あまりに似かよった響きを、彼らよりもはるかにマルクス主義の見識の高い高畠からも聞かねばならないのである。そして明治とは異り現実に労働者国家が出現したこの時代において、この論理は反共主義として、ソヴィエト国家の「虚像」を映す鏡以上に「発展」するし、現実に高畠は彼の意図した以上に右に流れ、彼のエピゴーネンによっていっそう右よりに受容されていくことになっていくのである。

Ⅳ　高畠「国家社会主義」の展開

一九一九年の『国家社会主義』挫折後の歩みを少しあとづけてみよう。「現代における国粋的社会思想の直接的淵源は、これを大正七、八年代に求むべきである」と、加田哲二は一九三八年に記している[62]通り、北一輝『日本改造法案大綱』権藤成卿『自治民範』はこの頃の執筆であるし、老壮会・猶存社・経倫学盟・大化会・建国会等の一連の右翼団体が輩出するが、高畠はこれらに必ず一枚加わっている。

老壮会と高畠については前述の通りだが、この分解後、猶存社同人岩田富美夫の斡旋により成立した経倫学盟は、高畠と上杉慎吉が提携したというので、〈高名な〉ものだが、その実態は貧弱で、高畠にしても上杉を利用して資金かせぎをしよう、という位の気持だったようだ。岩田と共に斡旋役となった茂木久平は後年この頃を回想して「高畠の期待は上杉の地位をもってすれば、相当の資金は作りうる。金さえあれば自分の力で大衆の信は寄せられる。そうして議会への躍進が将来の政治的活躍舞台の第一歩にならうと考えていた[63]」と語っているが、経倫学盟が所期の成果をあげえないと「君主主体説」と「機能主義的国家論」という、もともと異質の両者は分離し、高畠らは岩田・茂木らと共に大化会を結成する。この機関誌『急進』（一九二四

年七月創刊、二五年二月廃刊）は、二〇年代の高畠の理論活動の代表的存在であり、これには一九二四年一月、虎の門事件を契機に開かれた「国体擁護大会」（大阪今日新聞社主催＝大阪の右翼新聞で、茂木久平、矢部周などの高畠一派が入社）で知りあった津久井龍雄も参加した。

これとは別に、名古屋のアナーキストであった赤尾敏が、皇居前で転向を誓ったのちに経倫学盟でのつながりから高畠宅に出入し始め、国民の思想善導を目的とした建国祭運動を実施、頭山満・平沼騏一郎・上杉慎吉と共に高畠にも援助を要請し高畠はそれに応えているが、それは熱狂的共鳴というようなものとはずいぶん離れている。

建国祭は一党一派の運動ではない。狭義の国粋主義、狭義の愛国主義の現れでもない。日本国民全体が、国家の壁創に対して満腔の歓喜と敬祝とを披瀝し、元始を記念して将来のヨリ大なる覚醒に備へんとする国民的至誠の現はれである。……私は社会主義をもつて、建国祭と交換するのではない。むしろ社会主義者としての日本国民として、日本国民としての社会主義者として、進んで、これに参加するのである。……日本国民にとつて、日本国家は、皇室と共に最高無二の権威である。この権威のためには、国民は一切を犠牲とするの覚悟を要する。けれども、この権威の限界内においては、理由と必然の存する限り、国民同志間の抗争もまた闘ひ通さなければならない。それが却つて、国民を発展し向上せしめる所以ともなるのである。政友会は憲政会と、三井は三菱と、大毎は大朝と、日活は松竹と、福田博士は河上博士と、労働者は資本家と等……[61]

これら右翼団体をめぐる動きと共に、彼ら自身の系列の運動を見ていくと、一九二〇年は高畠が『解放』などで気をはいているのを除いて概して沈滞期で、彼らの同志松延繁らの作った仙台の大日本機関車乗務員組合争議の応援位が特筆される所であるが、これを契機に労働者の間に喰い込む計画を意識的に遂行せんと『大衆運動』なる週刊八頁の新聞を発行する。創刊号は一九二二年五月二一日、経営編集実務は神永文三、小栗慶太郎、執筆者は高畠・北原・松永らの同人の他に佐野学が坂上龍なるペンネームで「古代日本の社会階級」「大化改新の回想」などを連載、福田秀一が「万国時事」欄を担当していた。また後にアナーキストとなる長山直厚が「陸軍砲兵中尉H生」なる署名で、帝国軍隊を資本家や官僚の軍隊であるかの如く説く人々を

攻撃している。しかしこの間、北原龍雄の脱退（第一次共産党に参加）神永文三の足尾事件による検挙などで、小栗一人が孤軍奮闘の形となって、わずか三カ月で廃刊となる。この『大衆運動』の事務所は東京千駄木の高畠宅におかれたが、小栗の奮闘中も高畠は書斎での仕事に専念し表面にでての活動は少ない。

以後約一年間の「冬眠状態」が進むが、一九二二年秋、極小型雑誌『局外』（第一次）を何とか発行して突破口を見つけて出さんとした。題名は「俗流社会運動、俗流社会思想の局外に立って批判的な立場をとる」という意で、かつての同人北原ら第一次共産党の「ロシア輸入の資金をめぐって分配闘争に醜を晒している」「主義者」から「反資本主義運動の健全な発展」の方向を奪還することをめざすもので、山川「方向転換」論批判特集号も発行した。

この小雑誌は翌一九二三年五月号より某書肆の援助で百数十頁の中雑誌（第二次『局外』）に発展、彼ら大衆社同人の他に石川千代松、菊池寛、宮地嘉六、沢田謙らの名が創刊号にみえるし、第二号からの創作欄には菊池寛、宇野浩二、葛西善蔵、水守亀之助、正宗白鳥、芥川龍之介、近松秋江らが作品をよせた。しかし大衆社の機関誌としきれぬ発行書店との関係もあって震災と共に巨額の赤字を残して廃刊、やはり半年ともたなかったわけである。

震災後、前述経倫学盟を契機に接触した岩田富美夫らと共に大化会を結成、『週刊日本』を発行（一九二四年三月）ついで『急進』（第一次）を六〇頁の月刊誌として発行、研究誌的色彩の強いものになっている。さらに翌年には三二頁の小雑誌、第三次『局外』が高畠総監、津久井編輯で発行されたが「思想・文芸・学術・政治評論誌」と銘うったこの雑誌は多岐にわたりすぎて『急進』に比して思想運動の弾丸としてはやや欠けるうらみがある。[15]

このように一連の国家主義的運動系と高畠の関係は密であるが、しかし「マルクス主義者」高畠の歩みは決して単純ではない。一九二〇年、復活せる社会運動の波に乗じ社会主義者の巾広い統一組織として〈アナ・ボル〉を問わず結集した日本社会主義同盟の発起人にはやはり高畠の名を見出すことができる。『新社会』誌上に訳載されたカウツキー『資本論解説』の単行本は、一九一九年売文社より出版されると、すぐさま当時としては破格の一万部を売り、

さらに福田徳三らの企画した『マルクス全集』の一かんとして高畠訳『資本論』第一分冊が一九二〇年六月に出版、一九二四年に全三巻十分冊の全訳を完了し、戦前における唯一の完訳として日本のマルクス経済学に多大の貢献をすることとなったし、[66] 彼の一門による研究書、啓蒙書の数も多い。[67] やはり彼は一般には「マルクス学の最高権威」と目されており、また前述のように国家社会主義運動こそマルクス主義の必然的発展形態であるとして、自からマルクス主義者たることを否定することはなかった。

高畠が四二歳の若さで急死する一九二八年までの十年近くの間は、日本共産党の結成、総同盟分裂と評議会の誕生、普選実施と無産政党運動の本格化等、戦前における無産階級運動の高揚をもたらした時期である。しかしこの間の高畠の活動は、以上にみたように実践運動に関する限り低迷が続いている。もっぱら評論・研究活動が主体で、彼の影響下にあるグループの運動にも顧問格で第一線にでることも少なかったことはさきにみたとおりである。一九二二年に出版された高畠の評論集は『幻滅者の社会観』と題するものであるが、その序文には次のようなことを書いている。

――健康体の人が茅ケ崎に来ても何の変化も感ぜられないが、肺病の人には美しい空気が顕著なちがいをあらわす。「病理学の研究資料としては、健康体の人よりも病人の方が有用である。社会病人の心理は世態の真相をより如実に感受する。」そして私は「健全なる反動主義者や急進論者の目には尋常ならぬ病人として映すべきシロ物」だから「お世辞とオベンチャラの並べ合いを常習とする健康体の社会主義者や反動主義者の言う事は、社会病理の研究に貢献すところ至って微々たるものであるとすれば、私のような病人の言う事は此の方面に少なからず裨益する所なしとは断言できぬ」と語っている。左右両翼に対するこの高畠独特のシニシズムも問題にしなければならぬがそれはさておき、もっぱら書斎生活ですごした一九二〇年以後の五年間の高畠の政治姿勢を「社会の病人」「ツムジ曲り」という自己規定は示している。

この期の高畠は、①『資本論』全訳の仕事　②『改造』『解放』等の中央評論雑誌での研究評論活動　③高畠一派の政治結社の指導と、そこでの〈マルクス主義の発展としての〉国家社会主義理論構築のための理論活動　④若干の

団体の顧問就任[68]、等にその活動が見られるわけだが、この間の高畠の位置の特異さは、一九二五年一〇月二三日の『資本論』翻訳完成祝賀会に出席した多彩なメンバーからもうかがえる。約六〇名の出席者の顔ぶれは、上杉慎吉および建国会・経倫学盟のメンバー、前橋中学の同窓生大沢一六、同志社以来の旧友伊庭孝、アナーキストの石川三四郎・宮嶋資夫・江口渙・小川未明、農民党の平野力三、それに辻潤・五来素川、なかでも彼が常日頃「デモクラ屋」と攻撃していた吉野作造の出席には、驚きまた感激したという。[69]

しかし彼が『資本論』の全訳を一応完成したこの年に成立した普選法を契機に高畠は再び実行運動開始を準備していく。その具体化は、郷里群馬県より衆議院立候補をめざして「急進愛国会」の組織、軍部の〝ニュー、ライト〟、無産政党の〈現実主義〉派を統合した新国家社会主義政党組織のため、一方で宇垣一成・床次竹二郎、他方で麻生久・平野力三らへの接近である。

「高畠が胸中に描いた憧憬の人物はレーニンでなくムッソリーニだった。彼は日本のムッソリーニたるに於いて、彼の相棒を物色して之を踏台にして天下に彼の志を展べようとするのが理想であった。而して床次竹二郎か宇垣一成か、彼が物色していたのはこの二人である」とは友人茂木一次の言葉である。[70] 床次の方はその日和見から高畠の方も見限っていくが、宇垣との具体的接触は宇垣側の史料からもうかがわれる。宇垣日記、昭和三年四月二十日の条には「昨今両日に於て若き国士を以て自任して居るが如き高畠、安岡（正篤）、大川（周明）の諸氏と会談せり。何れも現世相を慨して余の蹶起を熱望しあるかの様なる口吻を漏らし居れり。余は必要の前には逡巡するものにあらざるも今一段と世相の糜爛し今一層国民多数の覚醒を待ちて仕事するにあらざれば徒らに紛糾を増し而も効果を収め得ること至難なるべき意見を漏し置きたりし。諸氏は同様に余に立派なる人物を勉めて接近せしむべく暗に諷し居りたり。余も近時其感を深くし居りたりし所なり矣」とある。高畠が日本のムッソリーニとして宇垣に白羽の矢を立てたのは決して的はずれではない。後の統制派の先駆として、明治以来の山県・桂などの軍閥イメージとは色彩を異にした「ニュー・ライト」派である彼は、米騒動やロシア革命を支配者の政治の貧困にその原因を求め、ソヴィエト政府に対し単

なる赤化アレルギーとして排斥するのでなく強力な「秩序」を再生させたことと評価し、軍縮や国際連盟は結局は「強国」の支配策の一形態で「永久平和は痴人の夢」としていること、政党政治についても、実際は少数者の政治がデモクラシーの仮面をつけたのみでそれに変わる強力なリーダーシップの確立を求めること、反資本家の立場と社会政策の推進の必要性の力説、といった主張をその日記にかきつけている。時至れば政界への野心は満々であるところもふくめて高畠とは共通の接点でくくりうるところも多い。この宇垣の他に政友会の森恪、前日本郵船社長深尾隆太郎ら[71]もかくれた共鳴者であったという。

同時に、その少しあと一九二八年九月頃より高畠宅に麻生久が頻々と出入するようになる。高畠はこの年の暮に急死するので、宇垣―高畠―麻生の結びつきの中から生みださんとしたものは陽の目をみなかったが、その動きは翌年になって麻生が委員長をしている日本大衆党の内紛の中であきらかとなっている。三・一五事件後、右派中間派の結集は進み、日本農民党・日本労農党に旧無産大衆党系も加えて日本大衆党が一九二八年一二月二〇日に結党され、委員長には麻生、書記長には平野力三が就任するが、結党後半年もたたぬうちに党内左派をなす旧無産大衆党の鈴木茂三郎、黒田寿男らが右派の平野力三と共に除名される事件が起る。事の発端は進め社の福田狂二により暴露され鈴木らに糾弾された麻生の右傾化問題で、福田によれば「昭和三年九月上旬、反動主義者高畠素之の宅に麻生が訪れ、日本労農党と建国会を近き将来に合同せしむる旨暴言し、建国会の綱領を認むるとの条件にて金三千円都合して呉れと懇願せる折柄、たまたま隣室に吉川守圀訪るるありて一切は暴露せり」というものであって、大衆党統制委員会が証人として吉川より聴取した所によれば、麻生の要請で高畠は宇垣から三千円を資金として引きだしたが、問題が表面化しかけて麻生はとりに来ず、その間高畠が急死したので高畠夫人の所に宇垣から三千円の返却をせまられている、ということであった。麻生はこれらについて否定しているが赤松克磨は、KKKなる署名で「日本大衆党分裂物語」なる一文を『中央公論』一九二九年七月号に載せこの間の経移を次のように結論づけている。

宇垣に政治的野心であり、政友民政の引っ張り凧になって

居るのは天下周知の事実だが、無産政党方面で最も早く彼に着目したのは平野一派である。平野一派は何回か宇垣の門をたゝいた。平野一派が宇垣をかついで、国粋無産党を作るといふ記事が新聞に出たのは大分前の話である。宇垣、平野、高畠、建国会といった顔触れの間には、或る種の脈絡があったやうに思はれる。そこに麻生が平野の手引で姿を表はした。

高畠の死後発表された彼の一文でも、一九二八年秋に麻生との接触を認めているが、その中で彼は「日本の無産政党も毛唐常套の御多分に洩れず、看板と口吻だけは例によって例の如き非国家主義だが、然し彼等の真情を叩いてみれば――少なくとも彼等の中で現実的運動に深入している連中の真情を叩いてみれば、どうしてもナショナリズムでなければ立ち行かぬことを、誰れも痛感しているらしいのである」と書いている。[72]

日本における共産主義と敵対する「社会民主主義」は、西欧のように〈大衆的社民党の存在――その左派分派としての共産党の折出〉というよりも、〈左派が運動の局面の指導者――右派の現実主義的分派としての折出〉という形態をとっていた。[73] このような現実主義的分派としての右派の折出は高畠らへの接近を一そう自然なものにしていったであろう。日本大衆党をめぐる動きも細部の確証をおくとしても、高畠を中心に一方に宇垣、他方に麻生・平野をすえて事をかまえんとしたことは事実である。

彼の死後、その門下の津久井、矢部周は平野を加え、上杉をかついで新党を画策したがこれも上杉の死（一九二九年四月）によって沙汰やみとなったのち、「故高畠素之先生創唱の国家社会主義を奉持する同志の盟団」である急進愛国党へ、そして愛国勤労党、日本国民党から満州事変を契機とする日本主義運動の一連のグループにひきつがれていく。これらは軍部内においてのファシズム運動とあるときは独自に、しかも客観的には密接な相関関係をもって、日本独特のファシズム運動を形成していく。これらの結社や、彼の門下といわれる津久井龍雄、石川準十郎らへの高畠の強い影響が、ともすると他の〈日本主義〉的、あるいは農本主義的ファシズム団体のイメージでもって高畠理論を片づける危険を有することになるのである。

＊　＊　＊

高畠は「社会主義者」として資本主義の打倒を目ざしているが、その内容はさきに述べたように「現存の日本国家（ヨリ具体的に言へば、日本の国家権力）が資本主義の為に利用されている事実を拒むものではない。我々は資本主義を敵視すると同時に此利用関係をも敵視する。然しながら、それは現実日本国家に対する敵視又は否定を意味するものではない。寧ろ日本国家を資本主義の毒牙より救わんとするものである」[74]という一句に尽くされている。彼は晩年には、自己の立場を「急進愛国主義」といいかえている時があるが、彼にとっては「官僚や既成政党の手先となる傾向」のある「右傾団体」や「外国勢力の手先となる傾向」のある左翼は「丁度昔の侠客の一派が幕府や旗本の手先となり、他の一派が大名や富豪の用心棒となった如く」で、両者は共に真に体制を変革する「愛国者」とは思われない。「宛かも彼の国定忠治の如く、背後に何等の支配力なく、生一本で唯だ良心の命ずる論理の儘に棄て身で勇往邁進せんとするもの」こそ「我が急進愛国主義、我が国家社会主義あるのみ」なのだ。[75]彼は同郷の士国定忠治を好み、よくひきあいに出すが、それはあらゆる体制や党派にも寄生せぬ独立自尊の精神を、国家社会主義の理念が要請したからにほならない。薩長いずれにも屈さず、かつ資本主義と政党政治のもたらす弊害への批判的な目を持った宇垣一成への接近もこの点から理解される。

しかし彼の反資本主義論は、この傾序々に抬頭しつつある権藤成卿、橘孝三郎らの農本主義的反資本主義論とは異り、自給経済の崩壊と資本制生産の成立を一つの必然として理解している。この必然としての資本主義体制は、資本家の自由な賃労働者を求めをための理念「自由と平等」というブルジョア民主主義の思想を生み、信用経済を形成させ、自給経済にかわる分業の大量生産の招来、それに伴う文化水準の向上と科学的合理精神の発達等、多くの功績を生みだしていることを、マルクスと同じく高畠も十分承知している。そして当初は資本家の営利追及は国家統制に代る自然調節機能を果していたが、この自由競争は小資本を駆逐してカルテルやトラストを生みだし「等価的交換」を原則とする自由競走の自己否定の段階に達すると、それは必然的に「国家権力と結合を必要とする。……今日では世界各国の資本主義がこの段階に入っている。」しかしこの

段階、即ち国家独占資本主義の段階もやはり社会進化からみれば「反動ではなく必然の推移」である。「資本主義は今や、功罪ともに終らんとしている。産業の統一と社会化も地ならしを行われている。社会の経済的発達は資本主義を必要とする段階を越え進んで来た。資本主義は今や、その根本精神と共に存在の理由を失いつつある。」[76] 資本主義の罪悪である労働力の商品化がもたらす大衆の反資本主義意識は、資本が国家権力と癒着している限り、反国家意識に転化する。この資本主義の独占段階において、それがもたらす「生産の社会化」が次の生産関係を準備する、という論法は全くマルクス主義の方法である。[77] しかも高畠においては「大衆の本能的愛国心」という信仰にも似たものが存在している。国家独占資本主義の下で没落と収奪に呻吟している大衆は、必ずや新しい国家の救済の手を求めていくであろう。その大衆の「平等と統合」をめざす本能こそ、彼らの運動を支えていくエネルギーになるにちがいないと観念されたものであった。

彼の国家社会主義の「政策」も以上の点から導き出されてくる。[78] 彼の政策私案を列挙すると、①ある種の産業国家主義「土地及び大資本の国有、並びにあらゆる大資本の国営」②普選の即時断行、工場法の精緻化、労働組合法など労働者保護立法の制定、間接消費税の撤廃、累進税率の増進、③無産者本位の物価公定制、④華族全廃、行政整理による官吏の半減、⑤国民皆兵制の完全実施、といった点をあげている。①は資本家の国家利用関係の排除のためであるし、②に無産者への国政「参加」を保証して反国家意識の増大を防ぐもので、彼によれば「普通選挙を行へば、非国家思想が蔓ると説くが如きは、大衆の現実的心理を解せざる愚味者の愚論」である。また減税をしても物価をつりあげて還元されれば元も子もないので③の政策が導き出される。⑤の国民皆兵制も、真の国民的団結の保証の一かんであり、④の政策は国民皆兵制実施のための財源確保という意味あいをおびている。さらに社会政策についていえば、これが決して資本主義の撤廃をめざすものではなく、いかに効果的に搾取を行うかというものにすぎない。このことを自覚しつつ改良闘争も行わないかぎり資本主義体制補強の走狗となってしまうことも力説している。[79]

また彼の人間観の特色である性悪観から考えてみると、

彼によれば「人間は皆横着な動物であるから、労働上の技能、実力、勤勉に応じて、収入に等差を附することを要す。」したがって「社会主義の社会主義たる所以」は①各人の出発点における機会均等、②実力、技能及び勤勉に応じた収入の区別、③①を保障するための財産、遺産の不許可、ということで[60]、ここで彼のイメージする社会主義はユートピアからはほど遠い機能主義的見地からとらえられている。

さらに反国家思想は彼においては資本家や既成政党だけではない。無産政党や共産党も「赤色帝国主義の売国奴」であり、この取締を政策の一項に加えるのは当然のこととされる。かつての同志たちに対する弾圧の教唆ともいうべき高畠の主張は、現存権力の暴力を肯定する点で「反体制」としての失格宣言である。しかしこの主張の背後には、山川均も述べているように、広範な大衆と何の結びつきもない「安価な、あるいは非常に高価な、自慰や自己陶酔」という「社会のスネ者[61]」の運動の大手術の必要性があると思われたからに他ならぬ。一九二二年国会に提出され廃案となった過激社会運動取締法案に対して『解放』誌より求められたアンケートに高畠は「正当かつ有効」と賛意を表らわしている。まだ治安維持法のないこの頃は大逆罪に低触しないかぎり罪も大したことはなく、コミンテルンの金で豪遊した近藤栄蔵、共産党の公金一万円持ち逃げの北原龍雄、あるいはモスクワとの連絡で活躍したブローカー吉原太郎など、第一次共産党には山師的存在が多い。高畠は気炎だけは高いこれら「左翼ゴロ」の「玉石を見分ける好機[62]」といって弾圧立法に賛意を表わすのである。

革命実現のための戦略・戦術についてはどうか。かつて高畠は堺と共に売文社における普選推進派の代表者であったし[63]、国家社会主義の政綱の中には普選の要求をとりさげたことはない。一九一九年以降しばらくの段階では、高畠は一言でいえば合法主義であり、敵が非合法な手段で攻撃を加えた時にのみそのワクを出る時はあっても、あるべき姿ではないと考えていた[64]。〈議会は多数決主義→無産者は多数→普選により議会で無産者は多数→議会の決定は国家の決定→よって無産者の意志が国家意志〉という図式をたてる高畠は、明治期の片山潜と変らないオーソドックスな議会政策論であった[65]。しかし山川との論争の中で「直接行

動」論は必ずしもサンディカリズムではない多様な修正が可能であるという論理は高畠の側にもはねかえってくるし、高畠が論拠にしたボルシェヴィキも議会政策ではない。高畠は議会政策を捨てさることはなかったが、後期になるにつれ、とくに普選がいよいよ実現する段階に至っては議会主義唯一論的ニュアンスをますますうすめていく。ストライキ、サボタージュ「ゲンコで撫でること」等々、階級闘争は多様で、議会もその一つである。要は革命運動に効果あるかないかで判断すればよいことで、何かを絶対的手段とする必要はない。一部には「普選を以て階級闘争の安全弁」という者もいるが、それならそれでいい。それを無産者の解放のために逆用する方策でも考えた方が積極的ではないか。官憲の出方により合法・非合法を使いわける技倆が革命家には必要なのだ、場合によっては暴力も必要だろう。しかし「知識は暴力に優る」ということも忘れてはならない……。[56] このような端々にみられる彼の階級闘争論は第二次大戦後の共産党の戦略におきかえても決して突飛なものには感じられないようなものである。

さらに抬頭する左翼の運動についての所論をみると、先にも見たように赤化帝国主義の売国奴取締は当然、という極論をはくが、これらの主張は無産政党運動に対して大した価値を置いていない、という基底的認識から生まれている。無産政党が議会に少々進出したところで「唯だ議会のヴァラィテーを豊富ならしむる」くらいであって、仮りに時勢の推移が彼らに政権を担当せしめたとして、あのドイツ社会民主党のように政権にしがみつくために妥協を覚え「有産者の一派」と握手するだろうし「掛引を覚えた頃には、いつの間にか蟬の抜け殻みたいに、肝心の無産党的実体は失われていることを発見するだろう。」およそ政党の離合集散はオポチュニズムに由来する。単一無産政党が不能となり左派、中間派、右派の三派鼎立となったのはその理論的必然があったわけではなく「幹部と称する商売人の相互的利害背反に基づいている」のであって、この点では既成政党と何ら本質的なちがいはない、[57] だから「普選下におけるプロレ有権者諸君、諸君はプロレタリア政党など造るに及ばない、」普選の実施は既成政党をして無産者のごきげんをとらしめるだろうから、どのみち既成政党化する無産政党を作るよりも、ブルジョア政党という「他人の

褌」で自己の主張をつらぬいた方が余程おもしろかろう、と放言するのである。[88]

高畠にとって左翼の論議はおよそ観念遊戯をくりかえしているにすぎず、震災以後のフェビアン協会や政治研究会は社会主義団体の倶楽部化であり、新しい大衆の本質を知らぬ彼らであればこそ社会主義思想は「観念遊戯の玩具」にすることができ、目先の利害で単一政党も不可能にすることができるのだ。福本イズムはその頂点にすぎない。資本主義が即時に崩壊するなといって気炎をあげる前にもう少し頭を冷やして現実の社会を見てみよ、[89]と忠告する高畠はここでも熱狂を知らぬ左右への「さめた眼」を見ることができる。そして無産階級運動の現実の担い手として突破を見つけようとする者は、必ず国家社会主義に接近する、というのが前述の麻生の例のように彼の確信であった。

にもかかわらず、左派のオクターブの高いスローガンの前に無産政党の右派は何故敗れるのか、高畠はその敗因について「従来、国法は愚か国家をもブルジョオアの道具と見做して反対して来た社会主義者が、社会主義の理論を捨てないで国法と握手する（＝議会にのりだす）と公言するからには、その前に社会主義と国家に対する理論的交渉を与えることが最大の任務」であるにもかかわらず、その努力を怠たったことは結局「現実主義」＝「官憲の玉よけ」となるのがオチで左派の意気に勝つことはできない。総同盟なども、最初は渋沢栄一にくっついたと見ると、次いでアナに、そしてボルに、普選がでたと思えば「無産政党」などといいだして次々と変節する機会主義者ときめつけている。[90]

論理的一貫法と合理主義を重んじる高畠はこのようなオポチュニズムや観念論議は我慢ならないものであった。かつて一九二二年秋、ムッソリーニのローマ進軍の報を聞いて「先手を打たれた」と口惜しがり泥酔して電柱に抱きついて泣いたといわれる高畠[91]も、ムッソリーニのファシズムは殆んど体系だった思想を持たぬ「行動主義」「実行主義」であって、その点でサンディカリズムやプラグマチズムと共通し「ベルグソン主義の亜流」ときめつけ、これに対しマルクス主義と国家社会主義は、ともに歴史合理主義として「共通してムッソリーニズムと対蹠を成している」と自分たちの理論を位置づけていた。[92]それは高畠死後、彼の直

接的後継者と目されている津久井龍雄の「天皇は、我等にとって、アルファであり、オメガである。一切は天皇に出でて、天皇に還る」[93]というような荒唐無稽なものとは異質のものであったはずである。

むすび

高島はその死に至るまで自らを「非マルクス主義者」と規定したことはなかった。一九二五年六月二四日の日付を持つ彼の論集『批判マルクス主義』の序文には次のように記している。

マルクス主義の真理的要素を認めることに怯懦であつてはならない。マルクスの命題に幾多の錯誤と矛盾とが含まれてゐることは事実であるとしても、少くとも彼れが資本制度の発達について与へた歴史的考察の価値は不朽である。更らに此考察の結論たる資本制生産の終了、次いで生ずべき新社会の曙光に対する暗示、並びに此推転行程に於けるプロレタリア階級の歴史的役割の強調――これらの貢献も亦、等しく不朽の価値あるものと信ぜられる。若し此等の考察がマルクス主義の本質的要素であり、而してマルクス主義の本質を是認するものは即ちマルクス主義者であるとすれば、私も亦一個のマルクス主義者であると言ひ得るであらう。然し私は又、マルクス主義の誤れる点をも熱心に強調する。そこでは仮りに私がマルクス主義者であるとしても、私をマルクス主義者と認めることはマルクスの神髄の冒瀆であると感ぜられるほど、私はマルクス主義においては極度に批判的である。

又、「マルクスの不滅性」と題する小文（『論想談』所収）には、東大経済学部の某博士が「もうマルクスの時代ではない」と語ったことを聞いて「かういふことを軽卒に口走る学者に限ってロクな奴がいない」として次のように記す。

マルクス信奉者の多くは晶負の引き倒しに了つてゐる。マルクスの一言一句などは問題ではない。個々の学説部分についても、古いものはドンドンすたれて行つて差支えないのだ。それではマルクスの有難味がなくなると考へるやうでは、まだ本当のマルクスの有難味を掴んでゐるとはいへない。小乗的の信仰だ。……マルクスにとつては、社会革命を法則として推論すると同時に、これを情意の意識的活動として評価するところに特殊な意味があつたのだ。……そこに不滅の生命があるのだ。けれども、この形に把握した問題解決上の方法論としての弁証法には、当時の学問的水準から脱却し切らない幾多の歴史的制限がつきまとつてゐる。かやうな制限は、

時の流れと共に洗ひ浚はれて、遂には弁証法の本体そのものまで廃兵に帰する。それでも、彼れの生きた価値は微動だもしない。彼れの真価は寧ろ、革命論究の方法論として弁証法を摑んだといふ、その天才的機智の一点にあるといひたい位だ。マルクスの形体を抱いて、マルクス信仰の安価な涙を手淫する弥次馬的マルクス信徒に対しては『もうマルクスの時代ではない』といふやうな低能的マルクス批判が、ちやうど手頃の喧嘩相手かも知れない。

高畠は終始マルクス主義者であることを自認しつつ、その「誤れる点を熱心に強調」したし、マルクス教条主義者や、資本主義即時崩壊説の夢と追う幻想的左翼への批判は厳しかったが故に、左翼陣営からは常に「右翼反動」とのしられ、日本大衆党内紛問題にもあるように高畠との接触自体が統制委員会に問責さるべき事柄と観念された存在であったが、他方、所謂右翼陣営からの高畠批判も多い。狂信的国家主義者の筆頭である『原理日本』の主宰者蓑田胸喜は、高畠を日本主義に反する盲目的翻訳主義者ときめつけているし、北昤吉は国家社会主義を「和製ボルシェヴィズム」で共産主義が前門の狼であるのに対し後門の狼であるとして、撃滅の対象としている。[91]

同志社時代から『東北評論』をへて『国家社会主義』に至る十余年の交友をあたためていた遠藤友四郎とは、一九二四年頃には離れているが、その理由としては遠藤が神秘化された皇室至上主義の色彩を強めていったことに由来すると思われる。その例証として一九二五年一月三一日から三日間、建国会が主催し、遠藤・高畠も参加した「明治神宮参籠祈願行」での遠藤の感想を、彼の個人雑誌『日本思想』にしるしているのをあげることができる。この祈願行はその日の夕刊にも「建国祭提唱者が断食祈願、高畠氏等十名・明治神宮に参籠」と大見出しであつかわれたものだが、遠藤が三日間を通じて「まじめに」「厳粛に」参加したのに対し、高畠は第一日目のみで、しかも祈願中にタバコを飲んだり、クスクス笑ったり、はては「仕事をしている時が一番神聖さ」といって翻訳の校正をもちこんだりしていることに、遠藤は憤慨している。[92]

さらに、高畠の死後、その直接的後継者と自他共に認めている津久井龍雄や石川準十郎のその後の歩みが、高畠を一そう国家主義的右翼的な理論の先駆という印象を与えて

いるが、その津久井は「天皇は、我等にとって、アルファであり、オメガである」というテーゼから始る「我等の運動に於ける若干の基礎概念について」（一九三〇年）に、まえがきを記して次のように語っている。

国家社会主義の根本理論については、我等の輝ける指導者高畠素之氏が夙に之を詳説してゐるところであるが、併しそれはいわゆる理論の範囲を出でぬもので、之を実際運動に開展して行く段になると、幾多の疑義乃至説明の不足が見出されるのである。……高畠氏は晩年全く実際闘争に対して関渉が薄く、その方面に関する戦略、戦術等の規定に関しては殆んど全く論ずるところなく、且つ氏の死後において既に早く一年数カ月を経て、スピード時代の現代においては客観的事情に大いなる変化あり、之に対して高畠氏の手に成る過去の記録が一々十分であり且つ普遍に妥当することは有り得べからざるところである。……実際闘争の経験が教へるその所説の不十分乃至誤謬に対しては、大胆に之を清算して、而して竟局における国家社会主義運動の大成を期することが、我等の先師に対する最も真実なる意味の謝恩に外ならずと考へる。

これらは、高畠自身との距離のへだたりを端的に示すものである。もちろん、それは万里の長城にへだてられる、というほどのものではないが、高畠の天皇観はより機能主義的実用主義的見地につらぬかれている。高畠が国家の本質を〈支配＝統制〉機能において見たことは前述のとおりだが、天皇制についても「我皇室が国民との間の血族的親縁を保ち、且つその支配的中心たるの地位を数千年に亘って保持せられる為めに、之に対する国民の感情は一種神秘化された崇敬と敬親とを含み、……機能運用の実際にあたって如何に有利な条件であるかは茲に絮述するを要せざるところであろう」[16]と、その支配機能の有用性からとらえているのである。

若き日の高畠が語るように「狭隘なる国家主義は寧ろ隷属的なる世界主義にまさる」[17]という視点はある意味では彼の一生をつらぬくモチーフであった。同時に安易に「日本的社会主義」を唱える者に対しては「日本には、社会主義の対象となるべき社会もあり、社会制度の変遷もあったが、学的体系としての社会主義なるものはなかった。……我々はまだ西洋の学説を十分コナして理解する所まですら進んで居らないのだ。……必要な段階としての翻訳の時代を通

過して居らないのではないか[69]」といましめることも忘れてはいなかった。いわば、高畠はマルクス主義体系の偉大さへの意識が、安易な社会主義の熱狂にも、又安易な国粋主義運動にも行くことができなかったのである。

高畠が「実行運動」をめざして国家社会主義にのりだしたとき、彼らの運動の基盤と観念されたものは何であったか。彼にとっては、自分たちの運動を支えるものは真の愛国心の保持である広範な無産大衆に求めらるべきであった。

> 真の愛国者は無産者の間に求めるほかはないのである。彼等は誇るべき地位も学問も財産もないかわりに、それだけ愛国的の精神は純粋無垢である。裸一貫の、赤裸々な気持になつて皇室を敬い国体の尊厳に恭順している。我が日本の真の意味の愛国要素は、何うしてもプロレタリア階級に求めなければならないのである。これが私の無産愛国党の必要を信ずる理由である。[70]

大正デモクラシー期において、明治憲法体制を脱却・改造する運動を支えた民衆は、同時に、関東大震災においては自警団を組織する大衆であり、また三十年代においては一連の「革新」支配層の「革新」運動を底辺に支えていく大衆でもある。そして三十年代の共産主義者の大量転向現象＝「一国社会主義」への先祖返りを強いたのも、これら共産主義者の大衆からの孤立感である。高畠は大正デモクラシー期の「改造」運動から昭和期の「革新」運動に移行していく局面における多義性を大衆の動向に視点をあわせつつ把握しようとする模索があった。その客観的役割の評価はおくとしても、日本の社会主義運動における啓蒙期から運動の実体化をめざす大正期社会主義の「模索の時代の社会主義」を象徴する存在といえよう。

さらにインターナショナリズムの問題、プロレタリア国家の問題についてみれば、高畠にとっては社会主義革命は、直ちにバラ色の未来の到来を夢想させるほど安直なものではない。資本制の崩壊の後に直ちに生産力の発展が保障されるわけではないし、何よりも邪悪な人間のエゴイズムは無限の支配管理社会を必要とされるように思われた。

ジョージ・オーウェルの未来小説『一九八四年』は、資本による搾取が廃絶された「自由」になったはずの人間を、徹底的に管理統制する国家のイメージがある種の壮烈さでもって描かれている。一九三〇年、世界恐慌の中で悠然と

五カ年計画を成功させたソ連社会は西欧知識人にとっては一つの憧憬であり、その憧憬がオーウェルをしてファシスト反乱軍からスペイン人民戦線政府を守る義勇軍に参加させていったエトスであったが、そこでの敗北の体験はソヴィエト社会へのユートピアを崩した。一国社会主義の官僚体制擁護のためにスターリンは妥協し、スペイン人民戦線政府を見殺しにしたと判断したオーウェルは、スターリン弾該を基底に流れるスペイン内乱のドキュメントを書き、そして戦後になってこの『一九八四年』をしるす。一九世紀末のイギリスの社会主義者ウィリアム・モリスの『ユートピアだより』という同じ未来小説には、労働の疏外から、人間の喜びとしての労働に転化した共産主義の美しい世界、エンゲルスのいう「全面的に発達した個人」としての人間の生きる世界のイメージが描かれており、明治社会主義者にとってこの書はしばしば紹介されていた。しかし現実の社会主義は、ユートピアではありえないし、今日私たちが知っている一四カ国の社会主義はモリスの世界からは遠い。そしてモリスからオーウェルへの道を日本において、現実の社会主義国が実現して間もない時に、すでに高畠によって問題提起がされていたとはいえないだろうか。

また高畠によれば「社会の根底的な中心的結合」は「地縁的、血縁的団体の上に懸っている」ところの人種的結合、国家的結合であり、このことと階級的給合とは何の因果関係もないのであるから、階級的対立が失われても、人種的国家的対立は失われるどころか、却ってより強い発動さえも予想される。社会主義も口先ではインターナショナルを唱えているが、心ではナショナルにもえている[109]、と語る高畠は、ソ連の一国社会主義戦略への転換を意識していたかどうかは別として、その後の大国主義の問題を予見している。さらに先頃のチェコ事件、中ソ国境紛争を知る私たちには、次の高畠の言葉は生々しさを増してくる。

> 労働者が階級的に国際的であるといふのは、資本主義を倒壊せしめる目的への必要であつて、それを不変の保証と考へるは短見の譏りを免れぬ。徳川幕府を倒すために、薩長が共同動作を採つたといふ事のみを以て、薩長の永久的共同を意味するなら明治年代に於ける両藩閥の争闘はどう理由づけたらいいのであるか。[110]

高畠の共産主義批判はスターリン主義というその虚像を

批判しているにすぎない、として高畠を批判できるかもしれない。しかしここで問題としているのは、そのような現代への高畠理論の類推ではない。社会主義・共産主義の理念の大混乱期の今日、今まで卑俗な正統病によって見すごされ、「右翼反動」で片づけられてきた思想家を、正当に位置づけるチャンスが与えられつつあることを指適したいのである。

高畠理論の陥穽を指適することは容易である。国家権力の統制機能が不可欠であるが故にそれは善なるもの、という論理の飛躍、自由主義の追求の当時における重要性と、高畠におけるその不徹底さ、等々。しかし大正期を特徴づける「マス」としての大衆の登場が、あるいはロシア革命のもたらした世界史の新展開が高畠の国家社会主義論の形成の大きなインパクトだとすれば、まさに高畠は日本社会主義史上における「明治の終焉」をラディカルに体現したということができるのである。そして彼は昭和期の共産主義運動と国家主義運動の双方の歴史の開始の結節点に位置していたのである。この意味で高畠は、山川均とともに「新しき運動の実体化、定着化をめざす過程としての大正社会主義」における象徴的存在といえるのである。

① 渡部徹「ロシア革命と日本労働運動」(『現代の理論』一九六七年一〇月号)など。

② 鈴木鴻一郎『〝資本論〟と日本』、「資本論各国語版解説」(『資本論辞典』所収)。

③ 一連の通史におけるこの記述のパターンには殆んどちがいはない。信夫清三郎・渡部徹・小山弘健編『講座現代反体制運動史』第一巻(一九六〇年)信夫清三郎『大正デモクラシー史』第五章(一九五六年)小山仁示『日本社会運動思想史論』(一九六六年)岡本宏『日本社会主義政党論史序説』(一九六八年)など。

しかし同様として高畠に直接接した社会主義者の自伝や回顧録には、この期の高畠の卓越性をそれなりに評価している。例えば一九一八年における山川、荒畑との「経済運動と政治運動」をめぐる論争(後述)は、後年高畠の論敵である荒畑寒村によって「山川氏すらも未だ全くサンディカリズムの影響を脱しきっていなかった当時において一頭地をぬきんでていたことを示すもの」(『日本社会主義運動史』一九四八年二六六〜七頁)としている。しかしこの荒畑も、この直後の高畠の国家社会主義運動の開始については「高畠君がどうしてこんな方向に走ったか、私には不思議でならない」(『寒村自伝』(上)一九五五年二三五頁)とあるように高畠の動向の内的論理を十分に把えていたとはいいがたい。一九一七〜一八年の高畠への高い評価と、その転向、そして無視という通史のパターンはこれらの反映である。

④ 堺『日本社会主義史』二一〇頁。

⑤ 戦後における数少い高畠に関する個別研究は、もっぱら非マルクス主義者の手で行なわれているが、それは社会主義の「日本的屈折形態」「土着の思想」の一変種、として評価されているのであって、マルク

ス主義の側からする「転向」論と事実上照応するものであり、「マルクス主義者」高畠をマルクス主義の方法に即して分析したものは存在しないといえる。

これらの系列としては、判沢弘「右翼政治家」（思想の科学研究会編『転向』下巻、一九六〇年、のち一部改稿して同氏著『土着の思想』一九六七年所収）、木村時夫（「〝国家社会主義〟の史的構造」（『季刊社会科学』第一二号、一九六八年一月）橋川文三「国家社会主義の発想様式」（日本政治学会年報一九六八年『日本の社会主義』所収）。

又、これらの論文にもあるように、高畠はその国家社会主義論に由来して、日本ファシズムの研究の中でとりあげられる。木下半治『日本国家主義運動史』一九三九年、同『日本ファシズム史』一九五二年、加田哲二『日本国家主義の発展』一九三八年、津久井龍雄『日本国家主義運動史論』一九四二年、など。

⑥ 高畠およびその一統の仕事のうち主なるものを列挙すると

一九二〇年　カウツキー、高畠訳『マルクス資本論解説』売文社出版部

高畠素之『マルクス学研究』公文書院

高　畠編『社会問題総覧』公文書院

一九二四年　カウツキー『解説』改訂版、大化会

一九二五年　カウツキー、石川準十郎訳述『マルクス資本論入門』（社会哲学新学説大系九）新潮社

一九二六年　高畠素之『マルクス十二講』新潮社

H、カーン、小栗慶太郎訳『マルクス資本論の展開』新潮社

一九二七年　カウツキー『解説』改訳版、改造社

一九二八年　高畠素之『マルクス学解説』改造社

神永文三『マルクス読本』資文堂書店

一九二九年　高畠素之他『マルクス経済学』（現代経済学全集）日本評論社

また『資本論』は、戦前において二度の改訳による三種が出版されている。

大鐙閣、而立社　一九二〇年～一九二四年　一〇冊

新潮社　一九二五年～二六年　四冊

改造社　一九二七年～二八年　五冊

このうち改造社版は予約販売の方法をとった廉価版として、合計一五万部以上を発行したといわれる。

⑦ 大正社会主義の「拠点」であり、高畠もそのメンバーであった売文社には、その主宰堺利彦の親友として山路愛山はしばしば訪問している（堺生「寄席と学校と倶楽部」『新社会』一九一六年五月）。そして愛山は平民社以来の彼ら「マルクス派社会主義者」との対話を依然持ち続けていたのである。したがって売文社につとめていた高畠も相識る機会はありえたと思われるが、二〇年も年長のせいもあってか、高畠と愛山の接触はあまりなかった様子であるし、高畠の後年の論説の中で、愛山に対比した自己の思想の位置づけは皆無である。

一九一九年、高畠と共に『国家社会主義』を創刊し、その五年後に至るまで行動を共にした同志社以来の友人遠藤友四郎は「皇室社会主義」「君主社会主義」を唱え、その参考文献に愛山の『社会主義管見』（一九〇六年）を明記している（同誌創刊号）が後述するようにこれは高畠とは異質なものに思われるし、これが両者の十余年の交友に終止符をうたせたものではあるまいか。

⑧ 『明治政治思想史研究』九六～九七頁。

⑨ 「黎明期労働組合運動におけるナショナルな契機」（『同志社法学』八七号）。

⑩ カー『ナショナリズムの発展』一九四五年。

⑪ 売文社入社までの高畠に関する史料としては、前橋中学校友会誌『坂東太郎』三七号～四三号（一九〇三年～〇五年）安中教会（柏木

義円）『上毛教界月報』六二号～一〇五号（一九〇三年～〇七年）茂木実編『高畠素之先生の思想と人物』一九三〇年（回顧文集）『東北評論』一九〇八年（明治社会主義史料所収）遠藤友四郎「同志社脱走記」（『霹靂』一九二〇年四月）茂木一次『大逆事件のリーダー』一九五七年、『前橋高校八十七年史』(上)一九六四年など。

⑫ 『へちまの花』第三号（一九一四年四月）の「高畠君一口評」で堺は、高畠を「日本社会主義者中第一のマルクス学者」と激賞している。

⑬ 三人の選挙委員を中心に、他に渡辺政太郎、和田久太郎、近藤憲二は選挙労務員、応援演説には馬場孤蝶、生田長江、安成貞雄、荒畑寒村、斎藤兼次郎、村田長太郎、北原龍雄、尾崎士郎、茂木久平ら。他に登壇予定者として添田啞蟬坊、久津見蕨村、山川均、宮島資夫、見波手治郎、荒川義英、久板卯之助、三宅雪嶺、安部磯雄らの名前があがっている（堺生「候補運動の経過」『新社会』一九一七年四月）。

⑭ 太陽暦三月八日、ペトログラードで発生した革命の報が日本で一般紙に報じられたのは三月一七日である。その報道はすべて「パンの欠乏」による突発的民衆暴動として描かれていた。例えば『東京朝日』三月一七日付には「三月八日九日の両日に亙り露都諸工場の労働者同盟罷工して市内を徘徊し交通機関の一部停止せられたり憲兵及コサック兵は市中の秩序維持に努めしも容易に鎮静せず右罷工の近因はパンの欠乏にあるが如く罷工者の示威運動に加はれる群衆はパンを与えよと叫びパン屋の破壊さるるもの多く負傷者が少なからず」とある。

⑮ のちに山川はソヴィエトを「労兵会」と訳し簡略さも手伝って以後普及した。

⑯ 官憲資料『特別要視察人状勢一斑、続三』二九四頁～二九六頁にこの手紙の全文がおさめられている。

「ニコライ・レーニン」氏並過激派党員諸君（和蘭海牙国際社会党気付）

同志諸君

我等ハ忌ハシキ戦争ノ終局並ニ革命ニ関スル貴下等ノ大成功ニ対シ茲ニ衷心ヨリ祝意ヲ表スルモノニ有之候……卿等ノ了知セラルル如ク当地ニ於ケル我等ノ運動ハ政府ノ迫害ニヨリ殆ント全然圧伏セラレ申候、サレト卿等ハ反乱ノ烽火ハ久シキニ渉リテ圧抑ヲ受ケタル後今ヤ爆発セントシツ、アリト信セラレテ可ナリ、一般的不平ハ既ニ猛烈トナリ民主的或ハ社会主義的思想ハアラユル中流及下流社会ノ間ニ地歩ヲ得ツ、アル次第ニ有之候……カ、ル故ニ我等ハ世界ノ社会的改造ニ関シ我等ノ運動カ挽回セラレ而シテ国際的僚友諸君ト共ニ或程度迄協力スルコトヲ得ルノ時期蓋シ遠キニ非サル可キコトヲ公言ス、休戦ノ比ノ危急ナル時期ニ際シ我等ハ重要ナアラユル事件ニ関シ卿等ト通信センコトヲ望ム、近キ将来ニ於テ開カルヘキ国際社会主義大会ニ関シ我等ハ出来得ル限リ我等委員ヲ派遣セントシテ或ル準備ヲナシツ、アリ、我等団体ニ関スル卿等ノ承認並ニ多クノ援助及助言ヲ望ミツ、

在東京社会主義者団代表

日本東京有楽町一丁目　　堺　利彦
　　高畠素之

売文社

ただしこの通信はイギリスで検閲官に押収されレーニンには直接届いてはいない。

⑰ 高畠「過激派の立場を論ず」（『国家社会主義』一九一九年八月）。

⑱ 高畠「雷の綻びと毬の破れ＝露独革命の比較＝」遠藤「時めく国家社会主義」（『新社会』一九一八年一一月）。

⑲ 高畠「マルクスの矛盾と河上博士の矛盾」（『解放』一九二一年一一月）のち「社会革命と政治革命」として『批判マルクス主義』一九二九年、に所収。

⑳「超国家的マルクス主義の矛盾」（『批判マルクス主義』六九頁）。

㉑「国家社会主義の必然性」（同上一七五頁）。

㉒「鬼に金棒」（『自己を語る』一九二八年、二〇五頁）。

㉓しかし「マルクス主義の本質は国家主義」とする時に、マルクスの思想には当然この規定にはみだす部分がありうる。例えば「資本制生産の科学的分析による産業国家主義」は彼の現実的、科学的の一面であるが「国家否定のインターナショナル」は彼の空想的狂熱的な面であって、両者は「水と油の矛盾的結合」であると観念された。（前掲注⑳論文）「科学者としてのマルクスに取っては、ただ論理のみが神であったが、情熱家としてのマルクスは直載なる情意のみを信仰とした。」例えばチミツで学究的な『資本論』の中に散在する文章のいつつか、「直接の生産に対する収奪は無慈悲極まる兇暴を以て、最も恥ずべく、最も不潔なる、最も卑陋にして忌はしき情熱の外に全うされた」「資本制的私有の弔鐘が鳴る。収奪者が収等される」といった数句は情熱的なるマルクスを示す。ここに「科学者としての『不変のマルクス』」と「情熱児としての『可変のマルクス』」という「マルクスの二重性」を高畠は抽出する（高畠、北原龍男「資本論講話㈠序言」『解放』一九二一年五月）。

しかし高畠は「科学者としてのマルクス」のみを肯定したわけではない。科学者としてのマルクスのみをみれば、資本主義の未成熟なロシアでは社会主義を起すべきではないし、起してもすぐ崩壊する、といった誤った「歴史合理主義」＝カウツキー主義が発生するのであって、むしろこの点を突破したところにボルシェヴイキの卓越性を彼はみるのである。またロシア革命のもっているこの矛盾を説明するために本文に述べたような「社会的革命」の前提条件としての「政治的革命」という概念が導入されたのであった。だから彼の『資本論講話』の序言の中でも「願くば此講話の一任務として、彼の革命的心性と、激越なる戦闘精神を語りたい。『資本論』理路の解説を平面的研究と云ふとすれば、之は寔にマルクスの立体的分解とでも称すべきであろう」と語っているのである。しかし「二重のマルクス」は、その一方がサンディカリズムや無政府主義を許す弱さとして観念されており、例えば遠藤は『共産党宣言』『科学的社会主義』（＝『空想より科学へ』）は危険思想だが『資本論』は国家主義であって危険ではない、というような議論をしている（『国家』に躓づく人々とエンゲルス説」『国家社会主義』一九一九年七月）。情熱家としてのマルクス主義のパトスを「直接行動」論から国家社会主義運動へととりもどすことこそ、高畠のいう「可変のマルクス」の内容であった。

㉔前掲「超国家的マルクス主義の矛盾」七五～六頁。

㉕大杉栄「無政府主義者のみたロシア革命・自序」『大杉全集』第七巻・三～四頁。

㉖近藤憲二『一無政府主義者の回想』一九六五年七九頁。

㉗このような明治社会主義の悪しき伝統をのりこえようとする高畠の意気軒昂なさまを前掲近藤憲二の回顧録からもう一つあげよう。同じロシア革命記念会の席上、発言にたった無政府主義者村木源次郎が幸徳事件にふれ、ロシア革命成就のあかつきに幸徳が生きていたらと「感激性の強い彼は泣いて話ができなかった。みんなシーンとしてしまった。ところが、高畠がワッハッハと大きな声で笑った。そして、『幸徳事件はわれわれの運動を頓座させただけだ！』といった。村木は高畠をにらみつけて坐った。」（七九頁）

この話には後日談があり、翌日村木が高畠にピストルをつきつけ色をなした高畠に「なに冗談ですよ」といって悠然と立ち去ったが、この頃よりアナーキストの高畠派への敵視は公然化していく。

㉘荒畑寒村「山川均論」（『改造』一九三一年一月号）。

㉙前掲「国家社会主義の必然性」。

㉚ このとき下獄したのは山川・荒畑（四カ月）の他、和田久太郎（一〇カ月）久板卯之助（五カ月）で、近藤憲二は不起訴となり、売文社分裂時の非高畠派は彼の他にはわずかに岡野辰之助、橋浦時雄くらいで、堺は事実上引退という形であった。近藤の前掲書『一無政府主義者の回想』と、高畠派の遠藤友四郎『社会主義者となった漱石の猫』（一九一九年）は、双方の立場から売文社分裂の情況をよく伝える史料である。

㉛ この点については反対派の近藤憲二でさえ、次のように記している。「高畠氏は語学もしっかりしていたし、演説もうまく、売文社の仕事も立派だった。馬場孤蝶、安成貞雄、堺利彦、高畠素之氏らが先生で、木藤殿、中西伊之助、尾崎士郎、茂木久平、北原龍雄の諸君、私、その他が生徒で、英語の講義をしてもらい、高畠氏は『共産党宣言』を受けもったが、話はうまく、明解であった。売文社の仕事も時間も正確であり、ルーズなところは微塵もなかった。……私は自分ではできないくせに、何ごとも几帳面にする人がすきだ。そういう点で高畠氏はすぐれていた。」（前掲書、一九七頁）

㉜ 「野性の呼び声・国家社会主義運動史(一)」（『急進』一九二九年六月）。

㉝ 高畠生「黎明会と老壮会」（『新社会』一九一九年二月）。

㉞ 遠藤『社会主義者になった漱石の猫』一二一頁。大庭柯公も布衣語人のペンネームで『日本及日本人』一九一九年四月一日付七五三号で、遠藤論文を「社会主義の弔旗」「日本のシャィデマン、ケレンスキー」「年来の主張を霞の中へ隠して了っている」と酷評している。

㉟ 以上、遠藤前掲書一二一頁～一二六頁。

㊱ 幸新本菅「売文社の分裂と友愛会の分裂」（『日本及日本人』一九一九年九月一日）伊井敬（近藤栄蔵）「高畠素之」（『解放』一九二一年五月）小栗慶太郎「国家社会主義運動史」（『急進』一九二九年六月より連載）でも、高畠対山川のライバル意識を否定していないし、この時期の売文社における高畠派の参謀格遠藤友四郎の前掲書においても理論上の問題以前の売文社の経営その他に関する堺らへの不満を述べている。例えば、この頃山川は堺の紹介で雑誌『中外』などで吉野作造、大山郁夫らの民本主義論に対する社会主義者の代表的反論を書いて注目されていたが、堺は高畠にそのような便宜をはからなかったこと（伊井）、あるいは一九一八年の売文社忘年会（堺は欠席）の情景を遠藤は語り、高畠が編集代表になってから大きな事業拡張もないのに給料が増えたのは堺がネコババしているのではないか、とか、事実上隠居の堺が百円も給料をとるのはけしからぬとか、我々を自分の子分のように社外に対して親分肌をしているとか、堺への社員の不満の空気を描いている。売文社の分裂は、これらの不定形な要素と高畠の理論上・実践上の堺・山川との相違が結びついて、高畠私党の結集となり顕在化していったものと考えられる。

㊲ 「スパルタカス」（『新社会』一九一八年一月）。

㊳ 「新日本魂の発揮」「天長節と聖誕節に対する所感」（ともに『坂東太郎』三八号、一九〇四年三月）。

㊴ 「政治上には社会改良主義で」という高畠らの議論は一般には正真正明の改良主義としてうけとられた。新人会の新明正道は彼らを批評して「経済的には資本主義の撤廃を高調しているが政治的には依然として旧い国家主義の砦を守ろうとしている。しかも此の立場たる決して並列的でなく、その戴く社会主義は民衆運動に順応して一時を糊塗せんとした国家主義が仮面として用いたものにすぎない」と断定する（『国家社会主義』の批評」『先駆』一九二〇年四月）。

㊵ 新明正道は前掲論文において、高畠派をドイツ社会民主党と比較し、"for the state" の高畠に対し、独社民党は "through the state" であり、社会主義と国家主義の主従関係は逆である、ときめつける。伊井敬（近藤栄蔵）「高畠素之」（『解放』一九二一年五月）でも、

高畠が「何物にも換へ難き熱願」として「実に恐ろしく『国家』を愛したものだ！　ところが、彼が『一切を犠牲に』してまでも愛する『国家』そのものの本体については――少くともこの重大な論文中には――一言の説明もない」とすれば「田舎の婆さんが唱へる『南無阿弥陀仏』と同一種のものであらねばならぬ」とし、さらに高畠のいう「大和魂にマルクスの入智慧」について「嗚呼、彼れの『国家社会主義』は、結局、彼れの性格の反映に過ぎぬ。狂的に強調された感情を矯正せんとして理智的学究に没頭した彼れは、終に、大和魂にマルクス液の注射を試みるの狂態を演ずるに至った。彼れの努力の苦痛、彼れの悲惨な失敗は、凡て、この無理な企てに宿っている」とその一文を結ぶのである。

㊶　遠藤「危険思想とマルクスの所説」（『国家社会主義』創刊号）遠藤の分類によれば「奨励すべきものは国家社会主義」そこまでいかぬにせよ「危険でないのがマルクスの純正社会主義」「紛れもなく危険なのに革命的労働組合主義者たるサンヂカリスト及び一切の権力を排して個人の絶対的自由を主張する無政府主義」としている。明治末年以来「社会主義」は、国有主義ないし社会政策と観念され（桑田熊蔵ら社会政策学会系のもののみらず、片山潜『都市社会主義』安部磯雄『社会問題解釈法』などもふくめて）それに対し、国体を否定する無政府主義や「君主」の対立概念としての「民主主義」こそ最も危険思想とみなされていたし、一九二〇年代初期に歓迎されたギルド社会主義も、国家と議会の必要を認めた「安全さ」故であった（太田雅夫「大正期におけるデモクラシー訳語考」『キリスト教社会問題研究』第一三号、渡部徹「日本のマルクス主義運動論」『講座マルクス主義』第一二巻）。

㊷　講演会は第一回を一九一九年四月二六日に開いたのを皮切りに夏までに数回開催、聴衆は大体百名から百五〇名前後。第一回のときの演題をあげると

茂木久平「国家を護る社会主義」
北原龍雄「唯物的明治維新」
高畠素之「国家を棒にふった話」
西川光次郎「労働者救済論」
司会　遠藤友四郎。

㊸　『国家社会主義』五月号予告では次の通り。社会主義概論（北原龍雄）社会運動史（尾崎士郎）唯物史観（茂木久平）社会主義倫理学（遠藤友四郎）社会主義の進化（小栗慶太郎）万国社会党の現状（高畠素之）過激派論（北原龍雄）労働運動（尾崎士郎）社会主義の両性問題（茂木久平）社会主義経済学（高畠素之）社会政策（遠藤友四郎）社会主義社会学（尾崎士郎）

ただし、この叢書は予告のみで、『欧米社会運動家評伝』（尾崎、茂木共著）他若干を除き日の目をみなかった。

㊹　「遠近消息」（『国家社会主義』一九一九年八月）。

㊺　小栗慶太郎「国家社会主義運動史(二)」（『急進』一九二九年七月）。

㊻　「大衆の心理」（『批判マルクス主義』一五七頁）。

㊼　高畠述『国家社会主義大義』一九三二年一頁。

㊽　高畠の国家論の持論はいたる所で語られているが、比較的まとまった叙述としては、『マルクシズムと国家主義』（一九二七年刊）後篇第一講「国家及び国家主義」、論文「急進愛国運動の理論的根拠」（『急進』一九二九年六月、石川準十郎らが改稿し、一九三二年日本社会主義研究所パンフ特輯『国家社会主義大義』として出版）。

㊾　「議会政治の正体と将来」（『論・想・談』一九二七年刊、一三二頁）。

㊿　前掲『マルクシズムと国家主義』後篇第三講「国家主義思想小史」。

(51)　「社会主義思想上の観念的傾向と現実主義的傾向」（『自己を語る』八八頁）。

52 以上「無政府主義論」（『論想談』および『人は何故に貧乏するか』一九三二年刊所収）。

53 前掲注61論文、八四頁。

54 「社会主義分類上の一考察」（『急進』一九二九年一月、のち『批判マルクス主義』所収）によれば、高畠は社会主義思潮を次のように分類している。

(1)無政府主義
(2)マルクス主義―共産主義／社会民主主義
(3)国家社会主義―倫理的国家社会主義／機能的国家社会主義

55 津久井『日本国家主義運動史論』一九四二年、一四七頁。

56 「ニヒリズム」（三〇三頁）。

57 「国家論に就て」（『急進』一九二四年九月号）「プロレタリア国家の論理的破綻」（同、一九二四年一一月）ともに『批判マルクス主義』所収。前者は「国家論としてのマルクス主義と国家社会主義」と改題。

58 『反デューリング論』第四篇第二章、なお訳文は高畠のものを採用した。

59 『国家と革命』第一章第四節。

60 もっとも『国家と革命』はソヴィエト国家成立前の著作（一九一七年夏執筆）で、このところの高畠の記述はこの著作を問題とするかぎり不正確である。また、今日見られるような形で（即ち高畠の批判する「死滅せざる労働者国家」という意味で）プロレタリア国家論が位置づけられていくのは、第一次大戦後のヨーロッパの「革命的情勢」が後退し「世界革命」戦略から「一国社会主義建設」路線に転換する時期以後、即ち一九二一年のコミンテルン第三回大会から数年の過渡期を経て、一九二〇年代の末より本格化していくものである。ボリシェヴィキ指導者は十月革命のはるか以前から、メンシェヴィキの理論〈ロシアの資本主義化→西欧先進資本主義国の革命→ロシアの革命〉という図式を批判し、後進資本主義国ロシアにおいてもプロレタリアの権力奪取は可能であることを説いていたが、その権力を維持し建設するためには西欧での連続的革命が必須の条件とされていた。一九一九年に創設された共産主義インターナショナルは、まさに「世界革命」遂行のための単一世界党として出発したわけであるが、当初のレーニンの構想は〈ロシア革命→ヨーロッパの連続革命＝帝国主義列強の革命→被抑圧国、植民地従属国の解放〉として世界革命が考えられていたし、いますぐにでも世界革命が起こるという判断の中では、後の「帝国主義の包囲の中で革命を建設し、擁護するためのプロレタリア国家」など考えられもしなかったのである（菊池昌典『歴史としてのスターリン時代』一九六六年、津田道夫他『現代コミュニズム史』上、一九六二年）。その点で高畠の指摘は、レーニンに関する限り正確とはいえぬが、コミンテルンに関する資料の殆んどが入手不可能な一九二四年段階で、その後のソヴィエト国家の虚像を描いた点こそをみねばならない。

61 高畠「労農帝国主義の極東進出」（『改造』一九二七年二月、『論想談』所収）。

62 加田哲二『日本国家主義の発展』三八頁。

63 茂木久平「上杉博士と提携した頃」（『急進』一九三〇年一二月）。

64 「建国祭」（『自己を語る』所収）。

65 これら高畠派の機関誌紙類は、『急進』を除き筆者未見である。山川批判など重要な記事があると想像されるが所在を御教示願えれば幸いである。この項は、第二次『急進』に連載された小栗慶太郎「国家社会主義運動史」によった。

66 山川均「大庭柯公さんと私」（随筆集『からす』一九三五年、所収）

によれば、反訳者に高畠を推薦したのは堺であった。高畠が、「反動化したあとも堺のマルクス学者高畠への評価は高いが、実際上にも当時の翻訳の大業を行いうるのは彼をおいてはいなかった。山川自身も主な外国語は英仏語で「私には『資本論』の反訳をやるほどのドイツ語の自信はなった」（同書三六〇頁以降）と語っている。

高畠の訳書は当時も評判よくその正確さは福田徳三も絶賛しており（『社会科学』三巻四号、一九二七年）戦後向坂逸郎は、この訳書のもつ先駆的意義を語って「高畠氏が翻訳されたときは、マルクス独特の専門語をどういう日本語に訳したらいいか、どんなに苦心されたであろうか、想像できる。私共はいつとはなしに、高畠氏の訳語を頭に入れてしまっている。……もし『資本論』を翻訳したことを、ほめる方がいたのなら、まずほめらるべき人は、高畠素之氏であろう」（『日本読書新聞』一九五七年二月四日）といっている。

高畠と同じ頃、松浦要、生田長江によっても手をつけられていたが、高畠はこの競走者に対して「生田長江君の癩病的資本論」（『警鐘』一九二〇年四月）などでその誤訳ぶりをこきおろし、ついに両者は原著の第一巻を完結せずに中絶した。その例を若干あげると、生田訳が「自然科学においては律動的なのが、互市場にては英吉利の尺度や重量が支配していた」というもの、高畠訳では「自然科学ではメートル制(metriches)度量衡が、世界市場に於ては英国度量衡が専ら行はれてきた」、その他「小ブルジョア世界」Kleinburgerliche Welt は生田訳では「微々たる商工世界」など、生田訳はずいぶんひどいものであったようである。

⑥⑦ ⑥参照。

⑥⑧ 高畠は、前述のように大化会など一連の「右翼」団体に関係していたが、他方総同盟、日本農民党、雑誌『解放』『進め』などの顧問もしていた。建国会は左翼運動へのテロ、スト破りを常習としていくようになり当然左翼団体とは反目を続けていたが、農民党の顧問をしている高畠に対して建国会はその機関紙上で非難した。高畠によれば顧問などは「風呂屋の水」のようなもので一杯や二杯くみだしてもどうというわけではない。「なれというからなったので、なったからとてどうせ風呂屋の水だから毒にも薬にもならなぬ」と軽く例のシニシズムでいなしている（「顧問」『論想談』所収）。

⑥⑨ 「資本論の会」（『自己を語る』所収）。

⑦⓪ 茂木実編『高畠素之先生の思想と人物』所収、一一二頁。

⑦① 『急進』一九三〇年一二月号、高畠回想座談会での津久井の発言。

⑦② 「今日の無産政党は皆いけない」（『批判マルクス主義』所収）。

⑦③ 高橋彦博「日本における『社会主義の分裂』と統一戦線党の確立」（『歴史学研究』三二一号）。

⑦④ 高畠『急進愛国運動の理論的根拠』大衆社パンフレット第一輯、一九三一年）。

⑦⑤ 「高畠さんの国定忠治観」（『急進』一九二九年六月）。〈国家社会主義〉をスローガンとする場合は、左右のいかなる既成勢力からも相対的独立を装わねばならぬことは、一般的に論理的必然である。愛山の『独立評論』を想起せよ。

⑦⑥ 以上、「資本主義の功罪」（『英雄崇拝と看板心理』一九三〇年、所収）「資本主義の長所」（『論想談』所収）。

⑦⑦ 例えば、レーニン『さしせまる破局、それとどうたたかうか』（一九一七年）における国家独占資本主義の記録・記帳機関の整備が、社会主義の「完全な物質的準備・社会主義の入口」で社会主義とのあいだに「どんな中間段階もない」ものである、という指摘は高畠の方法と寸分の変りもない。

⑦⑧ 「国家社会主義の政策」（『批判マルクス主義』）。

⑦⑨ この社会政策についての態度が、明治期の国家社会主義者山路愛山

や、議会政策派の改良主義的社会主義者片山潜と異る点である。高畠はすでに一九一四年一〇月号『第三帝国』掲載「社会政策と資本家の利益」において社会政策は資本家の利益増進に役立つ場合にのみ行われるにすぎないことを述べていた。次いでトルストイのエピゴーネンのふりまわす「労働の神聖」論は、搾取の実態を明らかにするものでないかぎり、資本家の論理であることを力説し（「トルストイズムの労働論を論ず」『新理想主義』一九一六年五月）工場法実施に際しては「死文で忠義を釣るもの」と批判し（「降りみ降らずみ」『新社会』一九一六年六月）さらに、一九一七年九月の『新社会』の時評では、社会政策によって労働者の絶対的な生活水準の向上はあるにせよ、その相対的地位の低下、搾取率、剰余価値率の増大を述べることを忘れない。彼は決して改良闘争を忘れることはないが、その根本的解決が資本主義打倒にしかないという最大限綱領を前面におしだす点では正統派社会主義者と同様であった。

(80) 前掲「無政府主義論」。

(81) 『山川均自伝』三一七頁。

(82) 高畠「正当且つ有効」（『解放』一九二二年三月、『幻滅者の社会観』所収）。

(83) 「普通選挙の機運」（『新社会』一九一七年五月）、高畠「時評」（同一九一七年九月）。高畠はここで「我々は民主主義者なるが故に益々議会の民主化を主張し議会の権力をおそれる新旧専制政治と戦わねばならぬ。議会の民主化は普通選挙の実施に待つ外はない。……我々は民衆として、此際普選要求の火の手を挙げたいものである」と述べている。

(84) 前掲「労働者に国家あらしめよ」。

(85) 高畠「議会政策の為に」（『幻滅者の社会観』所収）。これと『社会新聞』における片山の一連の論稿（例えば「帝国憲法と社会主義」同紙一九一〇年一〇月一五日号）と比較せよ。

(86) 以上「デモクラシーの馬脚」「それもよしこれもよし」（以上『論想談』）「議会運動」「国家社会主義の立場」（以上『批判マルクス主義』）よりまとめた。

(87) 「無産政党漫談」（『論想談』所収）。

(88) 「舞台と楫」「民衆に曳きづられる」（ともに『自己を語る』所収）。

(89) 「最近思想界の一感」「硬軟交錯の一新現象」「資本主義は断末か」（いずれも『英雄崇拝と看板心理』所収）。

(90) 「右翼の敗因」（『論想談』所収）。

(91) 木下半治『日本国家主義運動史』五四頁。

(92) 「ファッシズムと国家社会主義」（『急進』一九二九年七月、『人は何故に貧乏するか』所収）。

(93) 津久井「我等の運動に於ける若干の基礎概念について」（『急進』一九三〇年四月）。

(94) 蓑田胸喜「国家主義に対する精神科学的批判」（祖国会パンフレット第一輯、『国家社会主義を排撃す』一九三四年）北吟吉、同パンフ序文。

(95) 遠藤友四郎「噫、蛭子としての建国会」「建国神社の建立は無要の悪策」（『日本思想』一九二五年六月）。

(96) 高畠『国家社会主義大義』（前掲）。

(97) 「霊気漲々」（『坂東太郎』三七号、一九〇三年一一月）。

(98) 「日本社会主義」（『急進』一九二五年二月（『自己を語る』所収）。

(99) 「無産愛国党の基調」（『批判マルクス主義』）。

(100) 「超国家主義の迷妄」「白色と有色の争い」（ともに『幻滅者の社会観』所収）「偏見的インターナショナリズム」（『自己を語る』所収）。

(101) 「外国利用」（『幻滅者の社会観』所収）。

（京都大学大学院学生）

Onmyodo 陰陽道 in the *Insei* 院政 Period

by

Syu-iti Murayama

Onmyodo 陰陽道 in the *Insei* 院政 period, an era of overmaturity of the courtly Onmyodo, created social interest to the utmost complication and popularization under the influence of changeable and fanciful luxury in Insei, with the transition of political situation, repeated natural calamities and social uncertainty caused by the pessimism due to the Buddhistic theory of the latter days of the Law.

On the other hand, on account of positional fixation of the *Kamo* 賀茂 and *Abe* 安倍 families, there were many incapable oficial fortunetellers, though not a few prominent figures in the Law appeared except the fortunetellers of the two families; then, under such impetus, a few prominent figures appeared of these two families. And then, works in *Onmyodo* were newly composed by the specialists or intellectuals. These works caused various discussions. As the *Onmyo-ryo* 陰陽寮 as a link of the *Ritsuryo* 律令 system became changed on the wane, the official fortunetellers were forced to seek for their new direction of activities for the wider society.

On *Motoyuki Takabatake* 高畠素之論

——specialization of *Taisho* Socialism——

by

Masato Tanaka

Japanese socialism in the *Taisho* 大正 period was in the groping period for the purpose of substantialization of the movement from the enlightening period of *Meiji* 明治; which was discussed as an alternative "political movement means parliamentary policy or economic movement means direct action." Necessity of the socialists' intervention into the popular movement for political freedom was urged into converting from

the symmetry of total negation or total affirmation. Contemporaneously, *Motoyuki Takabatake* 高畠素之 who had the idea that the Bolshevik party, which won the Russian Revolution, was an overcomer of both "political movement and economic movement," commented the direct-actionists, the main current of socialists, after the above model, and tried overcoming the ten years' discussion. M. *Takabatake*, who thought that the necessity of enlargement of the huge Soviet State should be that of realization for the collective economy in Marxism, affirmed state socialism as a logical development of Marxism after the model of the Russian Revolution and therefore he has been considered as a convert to the rightist reaction. We should rank him in due position of one of the highest theorists in the *Taisho* 大正 socialism along with *Hitoshi Yamakawa* 山川均, both of whom tried to face and meet the inevitable problem of the *Taisho* socialism.

About *Wên-chung-tzu* 文中子

——especially *Tung-kao-tzu* 東皐子 as a clue——

by

Tadao Yoshikawa

About "*Chung-shuo*" 中説 by *Wên-chung-tzu Wang-t'ung* 文中子王通 imitated after "*Lun-yü*" 論語, there have been various comments around its credibility. This article, using as a clue "*Tung-kao-tzu-chi*" 東皐子集, the work by *Wang-chi* 王績, explains the credibility of *Wang-t'ung's* figure, and tries to decide upon the authenticity of "*Chung-shuo*". One and the biggest reason for the doubtfulness of "*Chung-shuo*" is that many illustrious retainers at the beginning of *T'ang* 唐 appeared as followers of *Wang-t'ung* in "*Chung-shuo*".

Though we cannot call them followers, such as *Ch'ên-shu-ta* 陳叔達, *Wên-yen-po* 温彦博, *Tu-yen* 杜淹 and *Wei-chêng* 魏徵, they presumably had some relation with the *Wên-chung-tzu* 文中子 clique. Though we cannot deny some pretext by the posterity should be found in "*Chung-shuo*". We may think that the image of *Wang-t'ung* in "*Chung-shuo*" should not be a quite unprinicipled and artificial product but a reflection without a little truth.